

『過去携帯』

draft 4 05/10/2009

女の子は誰でも一つは思い出の詰まった
携帯を持っているの

著：ノリ・サトウ

all rights reserved 2010 by Nori Sato

<http://www.geocities.jp/norismworld/>

「Norism」で検索

対象読者層：

女性は思い出として昔の携帯をとっておく。女性にとって30代は恋愛観の変化に揺れる年頃。20代の時の「ただ好きだ」との恋愛とは違い、30代に入ると恋愛の指標が変わってくる。単なる「恋愛相手」から、相手に「経済性」を求めるようになる。恋愛に「社会性」が入ってくる瞬間である。相手に求めるものが変わってくるのだから、「人を好きになる」という恋愛の定義も変わる。「恋愛⇒結婚⇒人生」という視点に立った時、大人の恋愛とは「人生の選択」であると同時に自分の「幸せの価値観」でもあることに気がつく。でも初恋が未消化だった場合、次の恋愛のステージにいけるのだろうか…。20代の恋愛と30代の恋愛を比べてしまう自分がいた。

あらすじ：

美咲と一輝は学生時代最後のクリスマスを二人で過ごそうと約束していた。夜の9時に恵比寿ガーデンプレイスで一輝のお気に入りの着メロを一緒に聞こうと…。しかし一輝が約束の時間に現れることはなかった。

時は経ち、9年後のクリスマス。美咲は一人でガーデンプレイスで一輝との9年前の約束を果たすために古い携帯の着メロを鳴らしていた。そんな時に直人が現れ、美咲の携帯をはじいてしまう。それをきっかけに二人の交際が始まるが、どうしても直人と一輝をダブらせてしまう自分がいた。美咲は一輝との思い出のメールや写メールが詰まった携帯を見る度に、いかに自分が自分の心を9年間に渡って閉ざしてきたかを思い知らされる。

直人は美咲が心の扉を開いてくれるのを辛抱強く待つが、ある時、美咲の過去の携帯を見たことでフラストレーションが爆発してしまう。そして二人は10年目のクリスマスを迎える直前に別れてしまう。美咲は再び古い携帯を手にしてガーデンプレイスへ向かうのだが…。

登場人物：

- 鈴木 美咲（みさき）32才（2010年）6/22/1978 生まれ。かに座。A型。
PR会社の広報担当。昔の彼氏のことをずっと引きずっている。
- 中森 一輝（かずき）22才（2000年）12/20/1978 生まれ。射手座。B型。
美咲の大学生の時の恋人。
- 堀口 直人（なおと）30才。10/10/1975 生まれ。天秤座。A型。
大手広告代理店のアート・ディレクター。美咲と付き合い始めるが…。
- 高杉 香奈子（かなこ）32才。O型。美咲の同僚で、学生の頃からの友達でもある。
- 石川 瑠実（るみ）29才。AB型。美咲と香奈子の同僚。

イメージの選曲リスト：

The Wedding Song - David Bowie	⇒ 一輝とのクリスマス・イブ
The Drifter - Roger Nicholas & Small Circle of His Friends	⇒ 9年後の職場
Dreaming With A Broken Heart - John Mayer	⇒ 思い出に浸る
Hello - RAM RIDER	⇒ ファッション・イベント
愛の歌 - Koda Kumi	⇒ ライブの時に直人と
A&E - Goldfrapp	⇒ 映画
Lovers In Japan - Cold Play	⇒ お台場
東京タワー - The Boom	⇒ 夜の観覧車
Mistakes Like These - Mithgy Six Ninety	⇒ ゴールデンウィーク
Little Bit - Lykke Li	⇒ 美咲の誕生日
Everybody's Changing - Keane	⇒ 関係の転換
Dont' Say You Love Me (Piney Gir Mix) - Erasure	⇒ 別れ
Don' t Say You Love Me (Radio Edit) - Erasure	⇒ 追いかける直人
きよしこのよる - Chara	⇒ 一人ぼっちな10年目のクリスマス
終わりなき旅 - Mr. Children	⇒ クライマックス
Last Scene - Supercar	⇒ 映画クレジット

* 小説内のチャプターの横にある緑の小文字は映画化の際の参考設定です。

キャスト案 (こんなイメージで書いています…):



鈴木美咲 ⇒ ヨンア (Oggi) みたいな女優さん



堀口直人 ⇒ 玉木宏



中森一輝 ⇒ 生田 斗真



高杉香奈子 ⇒ 上野なつひ
(ショートヘアとメガネで)



石川瑠実 ⇒ 英玲奈

終わりになき旅／Mr.Children

作詞: 桜井和寿 作曲: 桜井和寿 編曲: 小林武史 & Mr.Children

息を切らしてさ 駆け抜けた道を 振り返りはしないのさ
ただ未来だけを見据えながら 放つ願い
カンナみたいだね 命を削ってさ 情熱を灯しては
また光と影を連れて 進むんだ
大きな声で 声をからして 愛されたいと歌っているんだよ
「ガキじゃあるまいし」自分に言い聞かすけど また答え探してしまう

閉ざされたドアの向こうに 新しい何かを待っていて
きつときつとって 僕を動かしてる
いいことばかりでは無いさ でも次の扉をノックしたい
もっと大きなはずの自分を探す 終わりになき旅

誰と話しても 誰かと過ごしても 寂しさは募るけど
どこかに自分を必要としてる人がいる

憂鬱な恋に 胸が痛んで 愛されたいと泣いていたんだろう
心配ないぜ 時は無情な程に 全てを洗い流してくれる

難しく考え出すと 結局全てが嫌になって
そつとそつと 逃げ出したくなるけど
高ければ高い壁の方が 登った時気持ちいいもんな
まだ限界なんて認めちゃいないさ

時代は混乱し続け その代償を探す
人はつじつまを合わす様に 型にはまってく
誰の真似もすんな 君は君でいい
生きる為のレシピなんてない ないさ

息を切らしてさ 駆け抜けた道を 振り返りはしないのさ
ただ未来へと夢を乗せて

閉ざされたドアの向こうに 新しい何かを待っていて
きつときつとって 君を動かしてる
いいことばかりでは無いさ でも次の扉をノックしよう
もっと素晴らしいはずの自分を探して

胸に抱え込んだ迷いが プラスの力に変わるように
いつも今日だって僕らは動いてる
嫌な事ばかりではないさ さあ次の扉をノックしよう
もっと大きなはずの自分を探す 終わりになき旅

『過去携帯』 ノリ・サトウ

■プロローグ

携帯での会話

美咲： 「幸せってなんだと思う？」

一輝： 「星を見上げている時のことじゃないかな」

■一世紀に一度のクリスマス・イブ

二人の約束 2000年12月24日(日) イメージ曲： The Wedding Song - David Bowie

今夜は一世紀に一度しかないミレニアム・クリスマス・イブ。
恵比寿ガーデンプレースの中央で輝いている巨大なシャンデリアを目指して美咲は歩いていた。
中央広場へと緩やかに下るレンガ道の両側にはライトアップされたツリーが幻想的に並んでいる。
空気が冷えているせいか、冬の夜空は一年の中でもより最も暗く感じる。そんな中、シャンデリアを包む暖かい光が頭上のアーチ型のアーケードを優しく夜空の中に浮かび上がらせていた。

「雪だ。ホワイト・クリスマスかー」

美咲はレンガ道のプロムナードの入口まで来ると、ふと立ち止まって夜空を見上げた。

コートを着込んだ沢山の人が行き来する中、美咲は空の中に舞っている雪を見つめていた。

右側のオフィスビルから視線を左にずらすと、まるで真空の暗闇の中から無数の雪が突然出現してくるかのようだ。

美咲は背中まである栗色のロングヘアから雪を払うと「ハー」と息を吐いた。

目の前の雪が白い湯気と共に空中に舞うとすぐに消えていく。

冬の澄み切った冷たい空気と雪と暖かいライティング。美咲はこの魔法がかかったような特別な空気の中にいると、人の数だけ幸せがあるような気がした。

美咲は白いウールのロングコートのポケットから携帯をとり出した。スエードの紫色のパステルカラー手袋に握られたグレーシルバーのスティック型携帯画面には時間表示がされている。

2000.12.24[日] 20:44

美咲はその場で立ち止まると右手の手袋を外し、カチャカチャと親指を動かし着信履歴のメニューを開いた。

「あれ、一輝からだ。20分前だ…。間に合うのかな」

美咲は電話帳から一輝の名前を選択し発信ボタンを押す。

「あ、一輝。ちょっと早くついちゃった。そっちは大丈夫？」

携帯の向こうからは激しい風の音にまみれて一輝の慌てた声が聞こえる。

「今バイクですっ飛ばしてるから待っててねー！ 9時には着くから！」

「うん、わかった！ 大丈夫。気をつけてね。」

美咲が電話を切ると携帯に発信履歴が表示される。

発信： 2000/12/24(日) 20:45 一輝

美咲は携帯をコートのポケットに戻し手袋をはめると再び歩き出した。

そして中央で堂々と神々しく輝いているシャンデリアの前に来ると美咲は立ち止まった。

世界最大級といわれるフランスのバカラ製シャンデリア。250灯のライトから発せられる光たちは8,000個のクリスタルの中に散乱し、美咲を暖かく照らす。

美咲は今度は両方の手袋を外すとコートのポケットに入れて、再び携帯を取り出すと携帯メニューから設

定画面に入った。

アラーム： 2000.12.24[日] 21:00 終わりなき旅 MR. CHILDREN

美咲はアラームの設定時間を確認するとシャンデリアの方を見上げた。ついさっきまで手袋をつけていた手は少し汗ばんでいた。

8時50分。

美咲は両手をお腹の上にあてながら、もう一方の手で携帯を握り締めた。画面には一輝と二人で撮った写真が青白く光っている。

「あー、もう鳴っちゃうよ。九時になって置いてー」

美咲は一輝の姿が現われないか辺りを見回した。どこにも一輝が出てくる気配はない。

美咲はずっと携帯画面の時間を見つめていた。

58分、59分… 30秒前、15秒前、10秒前、5秒、3秒、2秒、1秒…

9時00分。

チャランチャラン。携帯からミスチルの着メロが流れる。半年前に二人でお揃いの携帯を購入した時に一輝が設定したアラームだ。周りの人が美咲の方に視線を送る。美咲は音が鳴ったままの状態ですばらく画面を見つめていた。

「うっそー！ 二人でっていついたのにー」

美咲は鳴っている着メロを切ると携帯をコートの中に戻すと両手もポケットの中に入れた。

なんかいきなりシンデレラの魔法が解けたような気がした。辺りには人々の足音だけが忙しいそうに行き来するだけだ。

「はー」と美咲は強く息を吐いた。白い湯気は寂しく中に消えた。

9時5分。

美咲は念のために携帯の着信歴を確認してみる。一輝からの連絡は入っていない。

アーケードの外から吹かれてくる雪が美咲の頬をなでていく。

9時15分。

美咲は腕時計で時間を確認する。美咲はウェーブのかかった前髪を横にかき分ける。

9時30分。

(おかしいな…)

横を見てみるとスーツ姿の男性が隣に立っていた女性を迎えにきたところだ。楽しそうな会話の音が遠ざかる。なんだか世の中はカップルばかりで、自分だけ一人ぼっちのような気がしてきた。

美咲は腕を組んで立っていたが、手を下ろしてみた。そのままゆっくりと周りを見渡し、また白い息を吐くと再び腕を組んだ。美咲はシャンデリアを見上げると腕時計を確認してみた。

時計は10時をすでに指していた。

■ 出会いは突然に

3人の愛の形 イメージ曲： The Drifter - Roger Nicholas & Small Circle of His Friends

あれから9年—

美咲のオフィスにある机の上のカレンダーは2009年12月になっている。

美咲はPR専門会社で広報マネージャーをやっている。丸の内の新しいオフィスビルに移転してちょうど一年たつ。

美咲は肩まである黒いストレートヘアを横に掻き分けるとPC画面に見入っていた。

「普通だったら、恋か仕事かって悩むところなのかなー」

美咲は小指でEnterキーを弾くと背もたれに寄りかかり、どことなく上を見上げた。新オフィスのキレイな白い天井の中に蛍光灯の光が部屋の反対側の壁まで列を成している。PC画面にはファッション・イベントの企画書が映っている。

「美咲ー、終わった？」

同じ事業部の香奈子と瑠実が約束のランチに向かえにきた。

「終わってないけどちょうどキリがいいところかな」

「ファッション・イベントの担当なんて楽しそう」

香奈子がメガネに手をやりながら美咲のPC画面の企画書を覗き込む。

細いメガネの縁に黒いストレートなショートヘアの香奈子はいつもインテリっぽく、白いシャツに黒いパンツ姿がシャープな雰囲気を出していた。

「香奈子のもいいじゃない。フローズンヨーグルトはここ数年きてるし」

「ヨーグルトのPRもいいけど、せいぜいローカロリーのダイエット効果ぐらいしかうたえないからね」

「お姉さん方、どこに行きましょうか〜」

美咲と香奈子より少し年下の瑠実が少し甘えた調子でいう。

「そうね、いつものイタリアンは？」

香奈子が提案する。

「賛成。あそこのパスタおいしいよねー」

美咲が答えると間髪を入れずに香奈子が続ける。

「そうそうニュース。瑠実が今度は営業部の土屋くん한테デート誘われてねー」

「ちがう！ ちがう！ あんな男ねー！」

瑠実をあわてて香奈子のニュースを訂正しようとする。瑠実は巻き髪の今風の子でいつも少し露出度の高いセクシー路線の服装のためか、男性陣からの引き合いが多い。

エレベーターのドアが開く。

「そんなことより、これカワイイでしょ！ あの有名な松下美智子にやってもらったのー」

瑠実は手を広げて二人に新しいネイルアートを披露した。

「あ、それってあの代官山の？」

美咲と香奈子はいつも瑠実の詰めのお手入れに関心していた。毎週ネイルアートが変わるのかようである。

「そうそう！ 前回は美咲がやっているファッションショーに出てきたでしょ」

3人はエレベーターに入ると学生のようにワイワイと楽しそうに会話を弾ませた。

美咲と香奈子と瑠実がオフィスビルの近くにある4階のイタリアン・レストランの窓際のテーブルに座っていた。少し曇った空が冬の寒さを演出しているかのようだった。

美咲は自分は窓から下を見下ろしながら、自分は暖かい屋内の中においてよかったとあたりまえのことを思った。店内にはクリスマスのデコレーションが施してあり、クリスマス感を増していた。

「で、瑠実は土屋くんのことどうなの？」

美咲はバジルのクリームパスタをフォークにからめながら瑠実に話しかけた。

「もう一美咲までー！ 私はあんな営業マンには興味ないわ！！ それより企画の北島さんでしょー」

瑠実は明るくあっけらかんとした女の子で、いつもオフィス内に陽気さを振りまいていた。

「それより香奈子姉さんと美咲姉さんはクリスマスどうするのー？」

瑠実がフランスパンを手にしながらかきながら聞いてきた。

「どうせ、私はダンナと。毎年同じでなんかつまんないかな…なんて。瑠実こそ、今年は誰かさんとかな」

瑠実の隣に座っている香奈子がすかさず聞き返す。

「瑠実はいつも男に困らないもんね」

二人の向かいに座っている美咲が感心している口調でいった。

すると意外にも瑠実は大げさな深い溜息をついた。

「はあー。そんな事ないわよー。今のダーリンは家族持ちだから、クリスマスはダメかもだって」

「えー！ また不倫中なの！？」

美咲と香奈子は驚いた。

「またってなーに」

「前の人も不倫だったんでしょ」

香奈子が首を振りながらいう。

「あら、お姉様、愛の形に不倫も不倫じゃないもないわ。20代までは色んな形の愛を経験するのも人生勉強のひ・と・つ！」

瑠実はそういうと人差し指を立てた。
「瑠実だってあと2年で30代だよ。あつという間なんだから」
美咲があきれる。
「まだまだよ！ 大人の恋はもっと楽しまなくちゃ！ サマンサみたいに」
瑠実は強気で答えた。
「でもサマンサも映画で結婚しちゃったよね」
香奈子がクールに返す。すると突然留美が、でも、という顔で続けた。
「とはいってもね、一人のクリスマスは確かに切ないや。せめてビイトンでもおねだりするか」
「それって物と天秤にかけるもの？」
香奈子は呆れてみせた。
「あら、物も愛の形でしょ」
「私はダンナには期待してないよ。自分で欲しい物は自分で買うし。口座も夫婦とはいえ別々だし」
「はじめから全部別々だったら、結婚しなくてもいいんじゃない」
瑠実は不思議そうな顔を見ると香奈子が答えた。
「多分そうかもしれない。あなた正しいかも」
瑠実はなんと答えていいものやら美咲の方を向いた。
「いいなあ、二人ともちゃんと相手がいて」
美咲がそういうとすかさず瑠実が身を乗り出してきた。
「美咲姉の方こそどうなの！ 美咲姉ったら本当にそういう話がでないじゃないですか」
瑠実が前かがみになり、美咲に顔を近づける。
「え、私？ 私はいいの。とっくにあきらめているから、無理」
「何いってるの！ 仕事ばかりしてるから見つからないんだよ。今からでも間に合うから、クリスマスの時ぐらい男見つけよーよ。あ、いっしょに探そうか〜」
「いーの、私は約束があるから」
「あれ？ もしかしてですか！！」
瑠実はうれしそうに反応するが、香奈子は顔をしかめた。
「美咲、ひょっとしてまだ一輝と過ごすなんていうつもり？」
香奈子は呆れたように首を横に振る。
「うん…」
美咲は手に持っていたフォークとナイフを置くのと下にうつむいた。
「美咲、もうそろそろいいでしょ」
香奈子は美咲に気遣っている視線を投げかけると瑠実と目を見合わせた。
瑠実は正直、香奈子の言っている事がよく分からなかったが相槌を打った。
美咲は窓の外へ顔を向けた。窓の外にあるビルの谷間に人の流れがあるだけであった。
三人のテーブルに沈黙が流れた。

最後のメール イメージ曲： Dreaming With A Broken Heart - John Mayer

「ふあー」
美咲は帰宅し、風呂を出るとタオルを髪に巻いたまま部屋のベージュ色のソファに座りこんだ。
美咲はカバンからワインレッドの折りたたみ式の携帯を取り出すとオーク色のコーヒーテーブルの上に置いた。
テーブルにはピンク紫色のランプベルジェのアロマランプが置いてある。
美咲はランプの金色のキャップを左手で持ち上げると、バーナーの芯に右手でライターの火を近づけた。
半分の照明の明るさの中で炎は明るく高く揺れる。5秒数えて美咲はキャップを閉じて炎を消してからキャップを再び外すと部屋の中にハナマスとバラの香りが広がる。「Mer d' Iroise」というアロマオイルで、一輝は海が好きだったので思わず名前を選んでしまったものだ。
美咲は横の台に置いてある古い携帯に手を伸ばした。9年前、一輝がまだいた頃に使っていた携帯だ。
美咲は携帯の裏に貼ってある古びたプリクラを見つめた。一輝とのツーショットである。
「香奈子がそろそろいいんじゃないかって…どう思う？」
美咲は携帯をひっくり返すと待ち受け画像の一輝に語りかけた。携帯を操作すると次々と宝石のような思い出の画像が出てくる。
昨日のようでありながら遥か遠くに思える学生時代の一コマ一コマ。キャンパスでのランチ、阿蘇山への旅行、居酒屋、明治神宮、お台場の観覧車など思い出の断片が溢れ出てくる。

この携帯の中だけは9年前のクリスマス以来時間が止まっている。画面の中に照らされている一輝は輝くばかりの笑顔をとたえていた。

「はあー」

美咲はどことなしにため息をつくとき携帯をコーヒーテーブルの上に置いた。携帯の画面には9年前のメール受信リストが出ていた。

件名： 2000/12/24（日） 18:54 今晚九時に！

リストの一番上の件名は、それが一輝から送られた最後のメールであることを示していた。

このメール以降、美咲はこの携帯電話を使うことはなかった。

美咲は携帯をコーヒーテーブルに置くと、引き出しからオレンジの箱を取り出すと蓋を開けた。そこにはピンクの石がリボンの形に並んだシルバーリングがあった。

美咲はリングを取り出すとしばらく眺めていたが、「ふう」と軽く溜息をつくときリングを箱にしまい、箱をそっと閉じた。

「もう9年か…」

美咲はなんとなしに呟いた。

9回目のクリスマス 2009年12月24日（木）

そして今年もクリスマスはやってきた。

美咲のうえにも平等にクリスマスはやってくる。

美咲は一人で去年と同じく恵比寿ガーデンプレイスのシャンデリアの前に立っている。正確には9年間同じくである。

みんながいう温暖化のせいなのか、一昔前みたいにクリスマスに雪が降らなくなったのはいつ頃からなのだろうか…。

美咲の手には9年前の古い携帯が握られている。携帯の画面には一輝とのツーショットが写っている。海で撮ったものだ。冬なのに手の平の中は夏になっているから不思議な気がする。写メールを数枚めくると美咲はシャンデリアを見上げた。

携帯の時計が21時を表示する。小さいキズの付いたプラスチックの画面の表示が切り替わる。

アラーム：

2009/12/24（木） 21:00 終わりなき旅 MR. CHILDREN

着メロがアラーム音として広場に鳴り響く。美咲は一人でシャンデリアの光に見入りながら音楽に聴き入っていた。

美咲の携帯から発せられるミスチルの着メロがコーラスにさしかかった時、突然一人の男性が前を唐突に横切り美咲の手から携帯を弾き飛ばした。

ガシャ、ガシャガシャ…

タイルの上に落ちた携帯のプラスチック音が広場に響いた。着メロは鳴り続けている。

（あ…）

美咲がそう思った瞬間、その男がとっさに携帯を拾った。男は携帯をじっくりと見て何かを確認すると美咲に差し出した。

「すみません！ 急いでいたもので…。あの、壊れてないですね」

ミスチルの着メロが鳴っている携帯を受け取ったものの、美咲はとっさの出来事に反応できなかった。

「本当にすみませんでした。…あの、携帯鳴っていますよ」

「あ、いえ、これは…」

相手は電話を取るよう促す。

「めずらしいですね、Jフォン」

相手は文字通り珍しいものを見ているかのように美咲の携帯を指差す。

そして、「携帯を落としてしまって失礼しました」と、一言いうと去っていった。

一瞬の出来事だった。

■ 再遭遇

アラサーの恋愛観 2010年2月

毎年のことだが美咲にとって、クリスマス、年末、新年の3大イベントは境界線があいまいなまま、あわただしく漠然と過ぎていった。そして2月に入りお祭りムードも落ち着くと、日々の日常の現実が実感としてやってくる。

新卒として入社してから丸八年経とうしていた。広報という仕事は毎年毎年忙しくなっていくように感じる。

美咲は雑誌の切り抜きを束ねると机の上の置き時計に目をやる。16時を過ぎている。まだお昼を食べていなかった事に気がつく。

美咲の携帯が突如なる。

「もしもし。あ、香奈子？ 瑠実といっしょ？ いくいく、どこのお店？」

美咲はオフィスの近くにある喫茶店にいった。休憩をとっているらしき人が数名店内にいる。

「美咲、こっち、こっち」

瑠実が手を振る。

「あ、声かけてくれてありがとう。ランチまだだったの」

「えー、もう4時だよ。夕食の時間じゃない。仕事熱心なこと」

香奈子がメニューを差し出す。

「そうでもないよ。それよりもう2月か。早いなー」

美咲はおしぼりを手にとるとアイスコーヒーを注文した。香奈子と瑠実はすでにコーヒーを飲んでいる。

「冬の一連のキャンペーンも終わってくれたから、広報としてはリリースが落ち着いたところ」

香奈子はホッとした感じでいう。

「こっちはファッション・イベントが3月だから、準備のまっただなかよ」

美咲は喫茶店の壁に貼ってあるポスターを指差した。

すると香奈子が思い出したようにいった。

「あ、そうそう。私のクライアントのアンプレッションさんもイベントに共催するからよろしく」

「もちろん！ 協賛金ありがとうございます！」

美咲が笑った。

「でもここ数年、ファッションの波がスゴイよね」

香奈子が続けた。

「私はファッションっていっても見せる相手もないしなー」

美咲はメニューを見ながらいった。

「何いってるの、美咲はこれから！ 美咲はキレイなんだから」

瑠実が会話に入ってくる。恋愛の話なら得意である。

「えー、そんなことナイナイ。瑠実とかと違うし」

「違うのー。美咲は自分の魅力に気がついていないだけ。合コンにいったらモテるわよ」

「そんな、私は全くだよ。仕事に追われて気がついたらもう31だし」

「なにいってるの！ 美咲姉さんはこれからです！ でも、美咲姉さんはなんで広報を仕事に選んだんですか？」

瑠実はそう聞きながらコーヒーを飲み干した。

「うんー、なんでだっけな」

美咲はいっしゅん考え込んだ。

「美咲は昔の彼がきっかけでこの業界に入ったんだよね」

香奈子が横から口を挟む。

「えー、何、何！ それすごくロマンチックに聞こえるんですけどー」

「香奈子、やめてー。もう昔のことじゃない」

「昔の彼が広告のクリエイティブ・ディレクター志望だったの。そしたら私はペアでPRをやっけてあげる、なんていっちゃって」

「えー、スッゴ〜イ！ 二人でタグマッチ？」
瑠実と香奈子は愉快そうに笑った。
「ちょっと香奈子、その話はもういいってばー」
「で、香奈子、その彼とはどうなったの？」
「あ、んー、もう学生の頃の話だからね…」
香奈子はいきなり言葉をつまらせた。
「そっかー、美咲はまだその学生の頃の彼を引きずっているのかー」
「だからその話はもういいの」
美咲は困ったような顔をして会話を換えようとした。
瑠実はふと何か思案するような顔をした。
「そうか、実らない恋だったのかー。ねー、お姉、どう思います？ 実らない愛は意味ないのかな」
「どうしたの、突然？」
香奈子が横の瑠実の方を向いた。
「実はクリスマスにダーリンと別れたの」
「えー！ 普通クリスマスに男と別れる！？」
香奈子と美咲はこの初ニュースに驚きだった。
「やっぱり不倫のダーリンじゃ、愛は実らないって思ったの」
「それって、実るの定義にもよると思うよ」
香奈子が理論的に返してきた。
「もちろん、結婚よ！ じゃないと私の幸せは報われないし」
「え？ あんた年末は恋愛だけが全てみたいなこと言ってたでしょ」
「う〜ん、でも年末に思ったの。結局ダーリンは一度に一箇所にしか入れないんだって…」
瑠実はしんみりといった。
「だって、クリスマスだっていうのに、家族に無理やり嘘をついて出てきたって困った顔ばかりしているし。もうそんな悩んでいるような男いないっ！ ってホテルから追い出したの」
「えー追い出したの！ で、どうなったの！」
いつもクールな表情の香奈子だが、他人の情事には人一倍興味があるらしい。
「それからダーリンからは連絡は全然来ない」
「瑠実って優しいのね。本当は悩んで苦しんでいる彼を開放してあげたかったんじゃないの？」
美咲がいたわるようにいった。
「あれ、お姉様、わかりますーう？」
瑠実は少し照れた感じで舌を軽く出した。
「でね、先月誕生日でいざ29才になったら考えちゃった。もう来年で30に突入だなんて。まさにアランド・サーティー」
「考えなくても既にアラサー」
香奈子がドライに言い放つ。
「だいたい、今は女性が独身でも食べていける時代なんだから急ぐ必要ないよ」
「でも香奈子姉は結婚しているからそういえるんです！ 幸せが保証されてるようなものじゃないですか」
瑠実がかわいくむくれてみせる。
「お嬢さん、結婚は人生のゴールじゃなくて、一つの通過点。幸せのゴールという意味ではないの」
美咲は香奈子と瑠実の応答をずつつ見ていた。いつもこの二人のやりとりは興味深い。
「でもクリスマスに一人になって、やっぱりいつもいっしょにいてくれる人がいいなーって」
「だったらちゃんと独身の男性を探しなさい」
「えーでも、なんか違うんだよねー。いい男は皆、結婚しちゃってるんだよね。やっぱり男はゆとりと貫禄が大事」
「そういつているんじゃないかダメね」
「それはキツイな。ヤバイ！ 私そろそろ戻るね」
瑠実は半分笑いながら席を立つ。美咲と香奈子の二人が残った。
しばらくして香奈子が口を開く。
「美咲、さっきのごめんね」
「いいの、大丈夫。もう昔のことだし、ずっと気持ちを整理できない私の方が悪いの」
「美咲もそのうち一輝以上の人に会えるってば」
「そっかー。このままいくと40になっちゃうかもね」
「この歳になって合コンもないしねー。といても私には関係ないか」
香奈子は軽く肩をすくめた。そして思い直したようにいった。

「でもそのうち必要になるかもな…」

「え、なんで!？」

美咲は意外な言葉だったので聞き返した。

「うーん、最近子供が欲しいなって思うのよ。もううち結婚して7年経つし、仕事もそこそこやりたい事やってきたからいいかなって。でもうちのダンナは子供はイヤだっていうの。だからあっちの方もご無沙汰でさ」

「え? それって仕事のストレスとかじゃなくて?」

「そんなことないってば。今年に入ってもまだやってないし。それにね、私も経済的に依存しているわけじゃないから、ダンナの必然性が最近よく分からないかな」

「えー、学生の時からのダーリンでしょ。てっきり幸せにやっているのかなって…」

「やっぱり学生の時だと、自分自身のこともよく分かっていないし、時間が経つとそれぞれ違う自分の人生が出てくるんだと思う」

「そこまで思うんだ…」

「いやだ、そんなに心配しないでよ。ただ最近気持ちが離れてきたのかなって思うだけ。倦怠期ってやつ?」

「……」

「逆にあんたが羨ましいよ。ずっと一輝、一輝って思えるんだから」

「でももう昔の話だもんね。なんとかしなくちゃ。なんか仕事とかで衝撃的な出会いってないかな」

美咲がストローを早くかき回した。

「どっちにしても今の美咲じゃ無理か。ちゃんと昔の美咲に戻らないと」

「え、昔の私に?」

「一輝くん以来、あなた、ずっと自分から逃げてるよ。現実と向き合わないで仕事に逃げているでしょ」

「え、そんなことはないよ…」

再び沈黙が訪れる。

美咲はうつむきながらゆっくりと氷がクルクル回るのを見ていた。

ファッション・イベント開催! 2010年3月7日(日) イメージ曲: Hello - RAM RIDER

3月7日。

毎年恒例のファッション・イベントは代々木体育館で開催された。

旬のモデルとブランドを見ようと、流行に敏感な20代中心の女の子が2万人このイベントに押し寄せる。

美咲の所属しているPR会社はこのイベントの広報を請け負っている。イベントの内容をテレビ、新聞、雑誌などの媒体に取り上げてもらえるように広報として動きまわるのが仕事である。

普通のファッション・ショーとは違い、業界人ではなく一般の女性がランウェイのモデルたちに喝采を浴びせる。ステージの合間には人気アーティストによるライブもあり、まるでお祭りのような熱気に包まれる。

特にイベントの一週間前から準備が極端に忙しくなっていったが、今日がいよいよ勝負である。

「媒体社様はこちらになります。プレスリリースキットはこちらにもご用意してあります。」

美咲は朝早くから忙しくメディア対応に追われていた。時計を見ると14時とある。開演は15時からだ。会場の外にはおしゃれをした女の子たちが沢山集まっている。開場するまでに各メディアの対応を急がねばならない。

ステージではギリギリまでリハーサルが行われていた。

美咲はイベントの主催社担当と確認をするとランウェイの先端にあるプレスのセクションへ向かっていった。

「瑠実、オールアクセスのパスをあちらの方に。あとアンプレッションさんの方はこっちのパスでお願いね」

香奈子と瑠実が美咲とは違うチームであったが、今日は助っ人で来ていた。

「美咲、アンプレッションへの取材カメラの方はOK」

香奈子が少し離れたところから手招きをする。

このイベントの協賛をしているアンプレッション社は香奈子のクライアントでもあった。

美咲はアシスタントに手短かに指示を出すと少し駆け足で会場のブースの方へ向かった。

協賛企業のブースの前に同じ年頃の男性が二人いた。

一人はアンプレッション社のマーケティング担当の水野であった。

「あら、水野さん、おひさしぶり」

水野はいつもながらピンクのワイシャツでちょっとキュートな感じのファッションをしている。

「どうもー。鈴木さんー。こっちこそー。どお、元気ー？」
いつもながらスイートなボイスである。香奈子はいつも「水野さんはあっち系じゃない」かと笑っていた。
続いて美咲はもう一人の対照的な感じの男性と名刺交換をした。薄暗くて見えにくかったが、若干細身の落ち着いた感じの男性で白いシャツで落ち着いたカーキ色のジャケットを着ていた。
「始めまして、広報の鈴木と申します」。
名刺交換を差し出した。
「はじめまして、今回アンプレッション様のクリエイティブを担当させて頂いている堀口です」
そういうと堀口は大手の代理店の名刺を出した。
肩書きにはアート・ディレクターとあった。
(一輝もアート・ディレクターやりたいっていついたな…)
名刺の肩書きを見ながら美咲は目を堀口の方にやった。
その時、堀口が驚きの声をあげた。
「あ！」
「え？」
「Jフォンの」
「…？」
「クリスマスの時にガーデンプレースで」
(え、なに…??)
驚きのあまり言葉が出てこない。
「すみませんでした、あの時は携帯を落としてしまって」
「あ、ああ」
頭がクラリときた。
「鈴木さん、取材はこちらのブース内でよろしいですか？」
水野が尋ねた。
「あ、は、はい、もちろんです」
テレビの取材班が協賛ブース内に入りレポーターを撮り始めた。
「では後程。水野さん、また後で」
堀口はそういうと後ろの方へ下がってブースを出ていった。
美咲はなんとなくいつまでも堀口の後姿を追っている自分に気が付いた。
(なんとなく一輝とは反対のタイプかな)

そこに彼はいた イメージ曲： 愛の歌 - Koda Kumi

ファッション・イベントが15時に開演し、会場内に抜けの良いビート音が爆音と共に鳴り響くと、モデルたちが華やかな衣装姿でランウェイに登場する。会場は2万人の女の子の熱気に包まれていた。
ステージには前面に5枚の大きなスクリーンがあり、中でも中央の一番大きなスクリーンはなかなかの圧巻であった。ゴージャス感のある斬新な映像が映し出されステージの演出をより際立たせていた。
ランウェイの前にはテレビカメラがズラリと並び、プレスの反響の大きいことがわかる。
美咲はメディア対応で走り回っていたが、ショーも後半に差し掛かると落ち着いてきた。
美咲は各テレビ局と新聞や雑誌媒体からのカメラ陣の様子を確認した後、音響のPAブースの階段を上っていった。
ブースの上に登ると幾人かの関係者が立って見ていた。目の前には大きなスクリーンがブランドのロゴを映し出していた。
美咲はブースの前の方へ歩いていくと、ランウェイを歩く旬なモデルたちを見ていた。
毎回、人気のあるモデルがランウェイに登場する度にファンの女の子たちの歓声が上がった。
美咲はふと自分の横に誰かがやってきたのを感じた。
「先ほどはどうも、堀口です。いつも高杉さんにお世話になっています」
高杉香奈子のことである。
「名刺交換の時はかなり驚きました。またお会いできるとは」
「いえ、こちらこそ。まさかあの時のとは…」
語尾が小さくなる。
「あの携帯壊れてなかったですか」
「ありがとうございます。大丈夫です」
「Jフォンってまた随分懐かしい銘柄ですね」

「歳バレちゃいます？」

美咲は堀口の方に軽く振り返ると会場の音を掻き分けるように答えた。

「ドコモだと年齢不詳になれますよ」

そう言うと堀口は自分の携帯を軽く左右に振った。美咲は思わず少し笑ってしまった。

突如、会場から今までにない大きい歓声が上がった。人気アーティストのライブが始まり、ランウェイの周りにいた子たちが黄色い声を上げて手を振っている。会場はさらなる熱気に包まれた。

ライブが3曲目に入った時、曲調は一転してダンスビートからバラードになった。

美咲と堀口はそのまま動かないで並んで曲を聞いていた。

狭いブースに関係者が詰め掛けてきたせいか二人の距離は縮まる。美咲は軽い緊張感と共に引き寄せられる感覚を体中で感じていた。美咲は堀口を意識しながらステージをずっと真っ直ぐに見つめていた。

二人の手の甲が何度か軽く触れる。

美咲は慌てて手を引っ込めると自分の胸に当てた。

美咲は思わず堀口の顔を見た。二人の目が合った瞬間、一瞬会場は静けさに包まれたかのような感触をおぼえた。

—無音の静寂—

一秒が永遠に感じられた瞬間。

二人の間の空間の距離が歪んだかのような感覚が二人を襲う。

そして会場内のライブの音がドッと戻ってくる。

美咲は我に振り返り視線を堀口からステージに戻す。

二人は前方を向いたまま立ち続けた。

ステージ前方の大きなLEDスクリーンは二人のシルエットを暗い会場の中に浮かびあがらせていた。

クリスマスは終わっていたけれど

イベントが21時に終了し、後片付けの後、関係者はアフターパーティーに行くことになっていた。

場所は恵比寿ガーデンプレイスの裏にあるウェスティンホテルである。

美咲はタクシーの前の席に座り、後ろには香奈子と彼女のクライアントの堀口が座っている。

はたからみれば普通なのだろうか、美咲にとっては不思議な空気が流れていた。

「さっき堀口さんから聞いたんだけど、美咲、前に会ったことがあるんだって？」

パーティーの招待カードをめくっていた美咲の手が止まる。

「あ、そうみたい。私は覚えていなかったんだけど…」

「それにしても、あの古い携帯をまだ持っていたなんて驚きましたよ。今でも電波入るんですか？」

堀口は興味深そうに聞く。

「いえ…あの携帯は使っていないので…電波は入るのかどうかは…」

「……」

堀口は不思議そうな顔をしていたが、香奈子は「ふ～ん」といった顔をしていた。

ウェスティンホテルにタクシーが着くとドアマンがやってきた。

3人は開かれたドアを出ると入口前に立った。

「美咲、ちょっと私先に受付に急ぐからよろしく。堀口さん、では後ほど」

そう言うと香奈子は駆け足でホテルの入口の奥へ消えていった。

「鈴木さんは急がれますか？」

堀口がふいにいう。

「いえ、大丈夫です」

「ちょっとだけいいですか。5分だけ」

「あ…はい」

美咲は不思議な感覚のまま素直についていった。

二人はホテルの正面から歩道に出ると道を渡った。

すると向かいには恵比寿ガーデンプレイスがあり、そのまま進むと中央広場を見下ろせるバルコニーに来た。クリスマスシーズンならキレイに光るツリーが並んでいるはずである。

週末の夜10時に人があまりいるはずもなく、二人は誰もいない静かで薄暗い広場を見下ろしていた。

「なーんだ、ライティング終わってしまいましたね」
堀口は閉まった遊園地についたような子供のようにつまらなそうにがっかりした口調でいう。
「そっか、もう、3月か。いつまでもクリスマスなわけじゃないですね」
堀口は美咲の顔を見て少し恥ずかしそうにはにかんだ。
「どこに行くのかと思ったら。堀口さん、おもしろいですね」
美咲は軽く微笑むと堀口に視線をやった。堀口はダークグレイのウールのコートのボタンを閉めないで寒そうに手で押さえて寒そうに立っていた。改めて堀口の顔をよく見るとなかなかのイケメンであった。少し長髪系だったが、清潔感のある紳士といった雰囲気を出していた。
（でも、一輝ほどではないな）と美咲は心で思ったが、そもそも全く反対のタイプだったので比較のしようもなかった。
「いや、またお会いできるとは思っていなかったので」
堀口は少しからかうような感じで「また」を強調していった。
「もうその話は恥ずかしいからいいです」
美咲は頬があったかくなるのを感じてうつむいた。
しばらく二人は無言で静かで薄暗い中央広場を見ていたが、堀口が穏やかな声でいった。
「じゃあ、戻りましょうか」
堀口は少し照れた感じの笑顔を見せるとそそくさと向きを変えて歩き出した。
3月の夜風がとても冷たいせいか堀口の歩調は若干速めだった。美咲は少しあわてて少し小走りで堀口の横までいった。
二人は無言でホテルへ向かっていった。でも、それは冷たい無言ではなく、なんとなく居心地良い無言であった。

美咲がパーティーから帰宅し、玄関でブーツを脱ぐと携帯に受信メールが届いた。
美咲は部屋に入りワインレッドの折畳み式の携帯を取り出して受信メールを確認する。

件名： 2010/3/8木 01:34 ありがとうございます
本文： 今日はシャンデリア終わっていて残念でしたね。次に出てくる時はいっしょに見ましょう。
おやすみなさい。ナオト

初デート 2010年3月14（日） イメージ曲： A&E - Goldfrapp

イベントから半月程たった日曜日の午後3時。
美咲が待ち合わせの六本木ヒルズの映画館の前に行くのと堀口がシルバー色の携帯を手にしながら横に並んでいるポスターの前に立っていた。暖色系の厚手のジャケットに明るい色のデニム姿だった。
あれから直人とは何度かメールのやりとりをしているうちに、今日、映画を見に行く流れになってしまった。
美咲に気がつくのと堀口は美咲の方へニコニコしながらやってきた。
「今日はお休みのところありがとうございます」
「こちらこそ声をかけて頂いて有難うございます、堀口さん」
「直人、直人でいいです」
「じゃ、直人さん。直人さんもこんな恋愛映画を見るんですか？」
「ま、一応女性のための広告をやっていますから。今日は女性市場のお勉強ということで鈴木さんをお誘いしました」
直人はちょっと照れながら頭をかいた。

映画が終わった後、シアター内の照明がついた。
「おもしろかったね！ カズ…」
美咲は思わず「一輝」といいそうになってハッとした。
「鈴木さん、これ良かったですね」
直人は名前の呼び違いには気がついていないようだ。
とはいえ、思わず一輝の名前が自分の口から出てきたのには自分でも驚いた。

二人は六本木ヒルズの横にあるバナリパ

の横にある喫茶店に座っていた。

「やっぱり恋愛ものはハッピーエンディングがいいですね」

直人はそういいながらとコーヒーを置いた。

「鈴木さんが最後に見た映画は何ですか？」

「ツタヤとかじゃなくて、映画館でっていう意味で？」

「はい」

「うんー、何かな…」

美咲は一瞬答えに詰まった。最後に映画館に行った時はいつだったかな…。

（あれ、もしかして一輝と9年前にいったのが最後？）

美咲は考え込んでしまった。何だったかな…。

「トム・クルーズのスパイの映画だったような…」

「えー、ミッション：インポッシブルの3ですか？」

「うーん、オートバイで戦うやつの話」

「それってジョン・ウー監督の方ですよ。2の方です。あれって一体いつの頃だったかな…」

直人は目を左上に寄せて記憶を手繰りだそうとしている。

「なんかそれって、9、10年前ですよ。僕はまだ新卒かなんかでその頃の彼女と見に行ったような…。ま、かなり昔の話ですけど…」

直人は恥ずかしそうに唇を噛みながら笑った。

「直人さんは今はいないの？」

「え、僕ですか？ いえいえ全くその気配がないです」

直人は困ったように目を横にやった。

「鈴木さんは？」

「私も同じくです。全くそういう気配なしです」

自然と二人の笑うタイミングが合う。

「鈴木さんはキレイだからモテるはずですよ」

「いえいえ、フォローしなくて大丈夫です。本当に」

美咲は頬を少し赤らめると照れ隠しにコーヒーを啜った。

駅に向かいながらも二人の会話ははずんでいた。

「鈴木さんは本当に学生以来彼氏がいないんですか」

直人は信じられないといった顔をする。

「本当にいないの、困っちゃうくらい。もうあつという間に31よ。」

「僕より年上なんですか？」

「え、直人さんはいくつ？」

「30です。美咲さんの方が年下かなって思っていました」

「ありがとう。で、直人さんこそ彼女はいらっしやらないんですか？」

「いやー、去年のクリスマスの前に別れちゃって…。ちょっとあれは軽いトラウマですね」

というと軽く笑った。

「いつも彼女に無理に合わせていた自分が結局悪かったんですけど。でもやっぱり自分に合う人を探すのは大変ですよ」

「直人さんは私にどんな男の人が合うと思いますか？」

「うんー、そうですね。鈴木さんは…」

直人は歩道の真ん中で立ち止まる。

「美咲でいいですよ」

「あ、はい。美咲さん」

直人は少し間をおくと続けた。

「多分、逆ですよ。『どんな男が合いますか？』ではなくて、『私はどんな人ですか？』じゃないかな。」

（え？ 私はどんな人？）

美咲は想定していなかった逆説的な直人の回答に面食らった。

「美咲さんは服を買いに行く時に、多分、自分の体のサイズを知らないと自分に合う服を選べないですよ」

二人は再び歩き出した。

「それはそうね」

「っていうことは…、自分自身を知らなければ、自分に合う男を探せないってことじゃないのかな。そんな気がします」

直人は頭をポリポリとかいた。

「それってなんかスゴイ言葉」
美咲は素直に感心した。
「いえいえ、自分が直に失敗して学んだので…」
「じゃあ、直人さんは私がどんな人だと思いますか？」
「うんー、それは難しい質問ですね。自分自身も自分を分かっていないので…偉そうなこといえませんが」
という立ち止まりちょっと照れくさそうに肩をすくめた。美咲も思わず立ち止まり軽く振り返る。
直人は美咲の目を見つめると笑顔で語りかけるように言った。
「美咲さんは素敵な方だと思いますよ」
美咲はそのような言葉を期待していなかったので返す言葉を思いつくことができなかった。無意識に手でシャツを軽く摘みながら、ただ胸が高鳴るのをはつきりと感じとっていた。
美咲は言葉を発することができないまま口を小さく開いたまま瞬きをする事ができずに立っていた。横を通る人々のせわしい足音だけがなんとなく聞こえる。
「…あ、ありがとうございます。お世辞でも」
「お世辞ではないです。本当ですよ」
直人は美咲の目を見つめ続けたまま穏やかに答えるとまた歩き始めた。
美咲もあわてて直人を追いかけた。
「直人さん、今日はありがとうございました。楽しかったです」
「こちらこそ、美咲さん。ぜひまた声をかけさせてください」
二人は夕食の時間の前には別れた。
美咲は六本木の日比谷線のホームで電車を待っているとメール受信の音が鳴った。

件名： 2010/3/14（日） 18:57 さっきの答えです
本文： 美咲さんに合う男性とは多分、私のことだと思います。ナオト

美咲は思わず画面の最後の答えに目が釘付けになった。
（え？ これって…）
美咲は頬を赤らめるとうつむいて携帯を閉じると、指先で耳をつまんでみた。

■天国までの距離

待っている姫 2010年3月15日（金）

3月の金曜日のオフィス。
美咲は週末前に案件をしめるために沢山のメールを処理する。
ファッション・イベントが終わり2週間以上たったが、今回のメディアからの反響はかなり高く、沢山のテレビ、新聞等でとりあげられている。当然、美咲の広報確認作業も忙しくなる。
気が付くと時計は13時を回っている。
香奈子と瑠実がやってくる。
「美咲、後パブどう？」
「おかげさまで！ 前回よりも媒体露出が2倍に増えたわ」
「えーすごいね！ どう、ランチいけそう？」
「ちょうどキリがついたから大丈夫」

「で、どうだったの？」
瑠実と香奈子がタイ料理のレストランで美咲の顔を覗き込むように迫ってくる。
「え、どうって何よ」
「堀口さんとのデート」
「ただの市場調査に付き合っただけよ」
「香奈子の仕事繋がりののにー？」
瑠実が怪しいぞという顔をする。

「いや、たまたまそういう話になって」

美咲はうつむくとパイアサラダをフォークでつついた。

「ふーん」

瑠実と香奈子が興味津々に詮索している目つきになる

「普通に映画を見てお茶しただけよ」

「えー、ゴハンは？ お茶だけ？」

「うん。だから知っているじゃない、ただの市場調査だってば。」

「もお～、美咲はダメね。もっと積極的に攻めないとだめだよ」

瑠実はいつも強気発言だ。

「前まではモテ女とかいわれていたけど、これからは『落とされる女』ではなくて、『落とす女』よ！」

「え、落とす女！？ 何を落とすっていうの」

美咲と香奈子は笑ってしまった。

「ちがうの！ 美咲はカワイイんだから、もっと積極的に恋愛しなくちゃ、モテない子に失礼でしょ」

「何、それって私のこと？」

香奈子が口をとがらせてみせる。

「香奈子は結婚しているから関係ないの」

瑠実はそういうとスプリング・ロールを手にとってソースにつけた。

「恋愛か…。私あまりそういうの分からないの。ずっとできてないから」

美咲が少し沈んだ顔をする。

「おやおや、お悩み相談ですか？ 美咲さんのハートを診断する必要がありますね」

という瑠実は携帯を取り出した。

「ほら、ハートメーカーって知っている？ 名前入ると美咲の恋愛が分かるんだよ」

「あ、知ってる！ それって脳内メーカーの新しいやつでしょ」

香奈子はすかさずいう。

「鈴木美咲でしょ」

携帯のキーをカチャカチャ打つと瑠実は携帯の画面を美咲の前に差し出した。

画面の中にはハートの形があり、その中に字が詰まっている。

ハートの左側には「恋」と並ぶ字の周りを「姫姫姫」と文字が囲んでおり、右側横には「優」の字が一文字。

「美咲、スッゴイ！ お姫様だってよ！」

と瑠実はうれしそうにはしゃいでみせた。香奈子もその画面を見ながらいった。

「確かに。姫のように白馬の王子様を待っているだけじゃ恋はやってこないわ」

「どういうこと？」

「たまには追いかけなさいっていう事」

香奈子がウィンクをしていせた。

美咲は神妙な表情をしてトムヤムクンを口に運んだ。

「ねー、恋愛ってなんだと思う？」

「え、男と女がお互いに好きになることじゃないの？」

瑠実がきょとんとした表情をする。

「そうね、二人の人がくつつくということですよ。二人の違った他人同士がくつつくわけだから、好き以上の感情が必要だよ」

香奈子らしく大人の意見である。

「香奈子姉さんは深いですね～」

瑠実は感心しながら質問を続けた。

「香奈子はダンナさんとの結婚の決め手はなんだったの？」

「恋愛の入口は相手のどこが好きかだけど、結婚だと相手の欠点をどこまで許せるかだと思うの」

「なるほどー。相手の欠点を受け入れられるかどうか。今のダーリンが家族持ちでも受け入れるか」

「はあー？ それって欠点以前の問題じゃない？」

美咲と香奈子は呆れた。

「何いっているの、自分の気持ちに素直になって何か問題あるの？」

「ま、しょうがないわね、好きになった相手がたまたま結婚してただけって言われたんじゃ。ただ、うちのダンナにはやらないでよ、私が迷惑だから」

美咲は香奈子の言葉を聞いて思わず笑ってしまった。

「ところで美咲、今晚よかったら会食どう？」

瑠実が誘う。

「え、ダーリングがいるのに合コンなの？」
「いいの！新しい恋愛が待ってるかもよーん」
「私そういうの苦手だからいいや」
「えー、香奈子は結婚してるから必要ないしー。美咲、行こうよ！」
「いいよ、どうせ瑠実はモテるんだから楽しんでおいで」
「美咲、どうせ帰ったって携帯でしょ。もう過去はしまったら」
香奈子は少し呆れた顔をする。
「そうじゃないんだ。一輝がじゃなくて、私自身のことなの」
美咲は一瞬困った顔をしたが笑顔でかき消した。

生きる為のレシピ 2010年3月19日(金)

金曜日の夜、22時半。
美咲は家で一人で昔の携帯を取り出してメールを見ていた。普通なら瑠実のように金曜の夜は合コンとか飲み会にでもいくのだろう。でも美咲はそういったものあまり興味を持てなかった。
一輝がいなくなって以来、いくら時が立っても心に穴が開いたままのような気がする。だから誰か他の人といつても自分の心の穴の大きさを実感するだけ悲しくなる自分が常にいた。
美咲は想い出のつまった携帯で受信フォルダのリストを無造作に上下した。そして一つのメールで止まった。

件名： 2000/8/26(土) 23:31 美咲に贈る言葉
本文： 「誰の真似もすんな 君は君でいい 生きる為のレシピなんてない」 Kaz

まだ自分が学生で進路に関して迷っていた頃に一輝が贈ってくれた言葉だ。ミスチルの曲の歌詞である。

「美咲、どう？」
二人は海沿いの堀の上に座っていた。一輝が手に持っている白いiPODからイヤホンが伸びており、二人は片方ずつのイヤホンをそれぞれの耳につけていた。
「ありがとう、一輝。いっしょにここまで来てくれて」
「いつも美咲はオヤジさんに会いにここにくるもんね」
「ちょうど3年経つんだ。私が高校卒業の前だったから…」
「あ、そうか…。もう4年か…。とてもいいオヤジさんだったよな。高校生のオレにお酒飲ませてくれたし…」
「それはいいお父さんとは言わないでしょ」
二人は笑うと遠くの輝く水平線を目を細めながら見つめた。
「お父さんがまだいてくれれば進路の事とか相談したかったしさ…。なんか私だけなんだよね、最後まで迷っているのって。晴子も舞も内定まで決まっているし。私だけかな、普通のOLになりたくないって思っているのは…」
「美咲は他の人と比べる事はないよ。みんなと同じ道に行ったからってそれが幸せだとは限らないし」
「なんかもっと自分のクリエイティブを試せる仕事はないかなって…。でも一輝ほど才能ないしなー」
「大体さっきの話じゃないけどさ、美咲は毎日ご飯をつくってくれるお母さんがいるだけでもいいじゃん。うちはオヤジとオレだけだからいつも料理っていえる料理じゃないぞ。うちは母親が駆落ちで出ていったからな…。うちの親みたいになんかにはなりたくないかな」
そういうと一輝は本当は辛いところなのだろうけれど笑い飛ばして石を海に向かって投げた。
少しの静寂の後にポチャンと音がした。
「美咲さ」
「うん、何？」
美咲は直人の方を向いた。
「美咲のお父さんは病院のベッドで最後に『一輝、美咲をよろしく』って言ってくれたんだ」
直人は美咲の目をまっすぐ見つめた。
「だからいつまでも美咲の側にいるよ」
「ありがとう」
直人は潮風に頬を当てながら目を閉じて言った。
「美咲、知ってるか、この曲さ」
「『終わりなき旅』は、桜井が手術で活動停止していた後に最初に出した決死の復讐曲なんだ。この曲に

は彼の魂がこもっているんだ。だから僕たちも自分の生き方に魂をこめていけないといけないんだ。美咲さんのお父さんの分もね」

「うん、ありがとう」

美咲は笑顔で答えた。なんか一輝が父親のように頼れるような気がした。

「一輝、なんかこの歌詞は一輝みたいだね」

「だろ？ いつも思うんだよな。ほら、ここ、『駆け抜けた道を振り返りはしないのさ』ってところ。過去を一生懸命見ても仕方ないじゃん」

一輝は続けた。

「それにさ、美咲は美咲でいいんだよ。誰の真似をする必要はないよ」

「一輝…」

美咲は携帯画面を見つめながら思わずつぶやいた。

(私は未来を見れているのかな…。現在をちゃんと見ているのかな…)

なんだかそう考えると急に悲しくなってきた。

名前のおり一輝は美咲の人生の中において一時だけの輝きを残していった。とても短い一時だったけど、その光は眩しく美咲の胸の中に焼きついてた。そしてその光があまりにも眩しかったので、一輝がいなくなった世の中は全て色褪せてみえた。

そして二人の思い出の写メールをめぐっていった。8月に一輝と明治神宮にいった時の写真だ。

「美咲、こうやって大きな木に手を合わせて額をつけるんだよ」

一輝はそういうと神社のほとりの横にあった大きな木に両手を当てると額を木につけた。そして美咲にも同じようにするように促した。

「木の太古からの記憶が蘇るよ」

それを聞いて、額を木につけていた美咲は笑いだした。

目を閉じると今まであまり意識していなかったセミの音が耳に入ってくる。

「美咲さ、多分ここで念を送ればお父さんに届くと思うよ」

美咲がチラッと一輝の方を見ると真剣に固く目を閉じていた。その真剣さにつられて美咲も再び目を閉じてみた。

熱い東京の中でもあそこだけは深い緑に覆われており神秘的な涼しさに包まれていた。

何分たったのだろうか。それとも何時間たったのだろうか。

美咲はいつの間にか携帯を握り締めたまま、コーヒーテーブルの上に顔をうつぶせて寝入ってしまった。

目には涙が少し流れた後がついている。手の平で目の涙の跡をぬぐうと時計に目をやった。

「12時半…いつの間に」

その時、美咲の後ろのソファに置いてある携帯のメール受信音が鳴った。

件名： 2010/3/20 (土) 00:35 来週月曜

本文： 夜遅くに失礼します。突然ですがよろしかったら明後日の休日、お台場にいきませんか？

もしいっしょにいけるようでしたらうれしいです。 ナオト

お台場と宇宙船 2010年3月22日(月)祭日 イメージ曲: Lovers In Japan - Gold Play

美咲は洗面台の鏡の前に立っていた。

メイクの仕上げに口紅で唇の上をなぞっていった。

美咲はいつも思う。お化粧品には女の子のモードを切り替えるスイッチがある。

美咲は鏡に顔を近づけて最終確認をする。

いつも見慣れている自分の姿のはずなのに、今日は若干緊張している自分がいた。

「美咲さんは素敵だと思います」という直人の言葉が美咲の中で軽くこだましていた。

美咲は化粧品用具をパチンと閉じた。

直人とは午後3時に新橋のSLの前で待ち合わせていた。

梅が遠くに咲き始めている3月とはいえ、まだまだ冬のように冷たい風が吹き抜ける。空も不安定気味で薄く曇っている。

一輝にいわせると新橋駅のSLは正式にはC11型蒸気機関車というのだそうだ。

「これはね正式にはC11型っていうんだけど、Cのチョンチョンっつうニックネームだったんだって。」

一輝は自分の雑学を自慢げに話していた。

そんなことを考えていると直人が若干息を切らせながら歩いてきた。

「ごめんなさい。待たせてしまって」

二人を乗せたゆりかもめは夕留のビル街を抜けると、いつも名前を憶えることができない駅を通り過ぎ、お台場に向かって水の上にさしかかった。何度乗っても近そうできて遠い距離に感じる。

窓越しに海を見ながら直人は口を開いた。

「美咲さん、この前はありがとうございました。楽しかったです」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

美咲は思わずかしこまって答えてしまった。

（この前のメールはどういう意味かな…）

あのメールを思い出すと、若干直人を意識してしまう自分がいた。

美咲は窓を見ながらとっさに会話を変えた。

「ほら、フジだ」

「美咲、知ってる？ あのフジテレビの中にはUF0が隠されていて、ニュースで地球の終わりを報道する直前に、選ばれた人だけが地球脱出しちゃうんだよ。」

一輝はフジテレビにある球体の展望台がUF0みたいだといって騒いでいた。

「一輝はその中に選ばれているの？」

「もちろん！ オレ様は日本のVIPだからね。」

「何、その日本のVIPっていうのは？ で、もし私が選ばれなくて乗れなかったら一輝はどうするの？」

「あたりまえじゃん。オレは美咲と地球に残るさ。タイタニックといっしょだよ。いっしょに愛のうちに死ぬのさ。」

美咲は一輝の突拍子もない発想とベタな回答がおかしくって腹を抱えて笑った。

「そんなことって本当は最初に駆け込んでしまうんじゃないの！」

「美咲さん、こっちですよ」

直人に名前を呼ばれて美咲は我にかえった。ホームを見てみると「船の科学館駅」とある。

「あれ、ビーナスフォートじゃなくて？」

「たまには珍しいところへと思って」

直人は軽く微笑みながら美咲の半歩前を歩いていた。

駅を出て少し歩くと円形の形をした建物にたどり着いた。

「ここです。未来館です」

直人はちょっと得意気だ。

「へえー博物館なんだ…。こういうのがお台場にあったんだ」

美咲は館内の上に吊り上げられている、光る地球儀を不思議そうに眺めた。

「やっぱり時代はエコなので、デートもエコ路線かなって」

直人は照れくさそうにいった。

（あ、これデートなんだ…）

と思った瞬間、急に直人を意識しだした。とはいえ別の考えが美咲の頭の中をよぎる。

（新しい恋なんてできるのだろうか…）

プラネタリウム

「美咲さん？」

どうしても気がつかないうちにタイムスリップしてしまう自分がいる。

二人は1階から7階の最上階まで繋がっていて吹き抜けになっているエレベーターを上った。6階まで上るとそこにはプラネタリウムがある。

プラネタリウムでは夜空の映像を見るものだと想像していたのだが、実際にはドームシアターとなっていて「宇宙エレベーター」というフィルムを上映していた。地上からロケットを打ち上げる代わりにエレベーターを大気圏外まで使うという未来の話だった。

美咲は映像を見ながらふと思った。

(天国はどれくらいの高さにあるのかな…)

映像が夜空の星になった時に美咲は夏の阿蘇山で一輝といっしょに見た夜空を思い出した。

「美咲、見て、スゲー。星が今にも降ってきそうだな。東京にはないね」

一輝は感動のあまり手を天に向けて広げた。

まるで天空一杯に黒色の風呂敷を広げて光の粉を吹きつけたみたいだ。

一輝が美咲の腰に手をまわす。

「ビルとか電信柱がないから、空がそのまま迫ってくるよな」

美咲は一輝の胸によりかかった。一輝は空を見上げながら語りかけた。

「ねー、天国はどれくらいの高さのところにあると思う？」

「クス」

一輝らしくいつもながらおもしろい質問だと思った。

「そうね。多分ずっとずっと上の方かな」

「他の銀河系までいっても届かないかもね。オレたちもいつかはあの光のどれかの世界にいくなんだ…」

「うんー、天国が光の国か。だったらあっちの星の方かもね」

美咲はオリオン座の方を指差した。

「光の世界でしょ。だったらウルトラマンと同じ故郷だな。M78星雲だっけ」

天国の話からいきなりウルトラマンの話になったので美咲はおかしくて笑い出した。

「じゃあうちのお父さんもウルトラマンと同じ星にいるのかな？」

「というかさ、美咲。オレたち二人とも死んでもそれぞれ違う世界にいつか行ったら困るよね…」

「えー、天国っていくつもあるものなの？」

「ほら、その人によって天国の意味が違うと思うんだ。それに天国も広いだろうしさ」

「その時は私が一輝を探しに行くから心配しないで」

フィルムが終わり、シアター内が明るくなった。美咲は我に帰った。

「探しに行くから」だけの言葉が美咲の中でエコーしている。

「あれ、泣いてますか…？」

直人が不思議そうにハンカチを差し出す。

「ちょっとコンタクトが…」

ありきたりな理由かなと思いつつとっさに美咲は返事をした。

二人はシアターを出てエレベーターを下ると他のフロアに立ち寄った。3階から5階に繋がっている円形のスロープを歩くと正面に円形の光る地球ディスプレイを見ることができる。二人はそこで立ち止まり、光る地球を見つめた。

「ねえ、直人さん」

「はい、美咲さん」

かしこまって答える直人が少しおかしくて美咲は笑ってしまった。

「直人さんは、天国はどれくらいの高さにあると思う？」

「うーん、天国までの高さですか…。多分、実際の距離というよりは、心の距離のことじゃないのかな…」

直人は地球儀の上をみると、今度は美咲の方を向いた。

「天国が心の中にあると思えばそこは天国だし、遠くにあると思えば遠くになっちゃうんじゃないかな」

(スゴイ)

と素直に美咲は思った。

(こんな難しいことを簡単にスラリといえちゃうんだ…)

「直人さんにとっては天国はどこにあるの？」

「心の中ですよ。だから子供の時に死んだおじいちゃんも僕の心の中にいるし。いつも寂しくなったり落ち込んだりすると心の中から嘔いてくれるんですよ。というか、そんな気がします」

直人の答えに美咲の表情が静止する。

(もしかして私は一輝を心の外においてきたのかな…)

美咲は光る地球儀に焦点が合わないまま上を見る。北極のあたりだろうか。

「美咲さん…？」

美咲は何もいわずにうつむくと頬から涙が伝った。

直人は何が起きたのか分からなかったが黙って美咲の横に寄り添った。

二人は何も言わずにそのままずっと光る地球の前に並んで立ち続けた。

ハート型の指輪

未来館の後に直人の提案で二人は観覧車に乗るためにビーナスフォートの中を歩いていた。大勢の買い物客の中を歩いている時、直人の携帯に電話が入った。直人は携帯をポケットから出して発信者を確認する。

「ちょっと失礼します。急用で」

直人は手を合わせてすまないというポーズをとると通路の横の方に行ってしまった。

美咲は立ち止まって改めて店内を見回した。その時にオレンジ色のショーケースが目に入った。

美咲は思わずショーケースの方まで歩いていった。

ショーケースの中にはリボンの形をしたシルバーリングが飾ってあった。リボンの中にある小さなピンクの石たちは照明の光を受けて指輪は輝いていた。

「美咲！ これかわいいでしょ！ フォリフォリのリング。オレ、これ見つけて美咲にぴったりだと思ったんだ」

一輝はそういう顔をショーケースに近づけた。まるで美咲のためにといいながら自分が欲しそうな感じ見入っていた。一輝は普段は男らしい性格だったが女性のような感受性も持ち合わせていた。

「美咲、オレ、バイト貯めていつかこれをサプライズ・プレゼントできるように頑張るよ！」

「先に言ったらサプライズじゃないじゃない」

美咲はおかしくてつい笑ってしまった。

「美咲さん、お待たせしました」

直人の声で美咲は我に返った。

「すみません、急ぎの電話だったので」

直人はすまなそうにいった。

「あ、気にしないでください」

「美咲さんはこのデザインが好きなんですか？」

「え、ええ…。はい」

「かわいいですね。リボンの形ですね」

直人はショーケースに顔を近づけたが、姿勢を戻すと歩き始めた。

観覧車 イメージ曲： 東京タワー - The Boom

3月とはいえまだ春には完全に入っていない。日が短く夕方から暗くなるのは冬の名残である。上を見上げると巨大な円形のネオンライトが暗闇の寂しさをかき消すように光っている。

直人と美咲は円形のフロアの上をゆっくりと流れる観覧車に乗り込んだ。

観覧車が一周するのに16分間。115メートルの高さまでゆっくりと連れていってくれる。二人を乗せた観覧車は天辺の高さの近くまで来た。遠くに見える夕日色の空と黒い影に見える都心のビル。

目の前の直人はずっと無口でいる。しかし別にロマンチックな雰囲気浸っているわけでもなさそうだ。美咲には長い沈黙があるように感じた。

「ほら、あっちが羽田」

そうやって美咲が立って後ろ側を指差した。カートが少し美咲の方へ傾く。

「うあ」

はじめて直人が声を発する。よく見ると直人は横の窓の取っ手を握っている。

「え？ 直人さん高所恐怖症なの？」

「お願い、揺らさないでください」

「えー！ 本当にそうなんだ。」

美咲はイタズラそうな目をすうとカートを何回か揺する。

「うわ、やめて、やめてください」

直人は慌てて美咲のコートを掴む。

「美咲、後ろ向いてごらん。羽田空港が見えるよ！」

一輝が観覧車の中でいう。

「あ、本当だー！ 晴れているからよく見えるね！」

美咲がいきなり立つと観覧車が美咲の方へ傾く。

「オットお！ ちょっと待って、立たないで！」
「え、なんで？」
「オレ、高いのダメなんだってば」
「えー、知らなかった！ 一輝高いところダメだったの！？」
美咲はうれしそうにカートをガタガタと揺らす。
「うわっ、超勘弁。やめて」
一輝が美咲を止めようとしがみつく。
「キャー ちかん！」
美咲が笑いながら声をあげる。

ハッと美咲の意識が現在に戻る。
美咲のコートを掴んでいる直人と目が合う。
「あ」
二人はとっさに意識して離れる。美咲は向かいのシートに座る。
少しばかりの静寂な時間が流れる。
「夜景、キレイですね」
直人は気まずさを打ち消すかのようにいう。
美咲は静かに頷くとポロリと言った。
「もしかしたら天国の夜景もこんな感じかな」
「え？」
直人は不思議そうな顔をしたが少し考えて答えた。
「天国から地球を見たら地球も天国に見えるかもですよ」
美咲は深く頷いた。直人の言うとおりに確かにここが天国かもしれないと美咲は思った。
まだ冬のような夜空の中、観覧車は13,000個のネオンから幻想的なイルミネーションを発していた。

車じゃないの？ 2010年3月23日（火）

「美咲、美咲！」
美咲は会議室で一人で企画書をなんとなくポーと見つめていたが、名前を呼ばれて我に返った。
「え…？」
「何か考え事でもしてたの。堀口さんとのデートのことかな？」
香奈子と瑠実がテーブルの向かいの席に座っていた。
「え、ちがうよ」
「ふーん」
香奈子が腕組みをしながら信じてないわよといった顔でからかったようにこっちを見ていた。
「で、美咲お姉さんの休日デートはどこだったの？」
瑠実が前にのりだして興味津々に聞いてくる。
「デートじゃないってば」
「いいから、いいから、で、どこ行ったんですか？」
「普通にお台場に言っただけだってば」
「直人さんどんな車で向かえにきてくれたの？」
瑠実がすかさず聞いてくる。
「え、車？ 普通にゆりかもめだよ」
「えー！ 車じゃないのー！ 信じられない」
「何がよ」
「学生じゃないんだから、ちゃんと車で迎えにこないとダメ！」
「わ、瑠実ってイヤな女ー」
香奈子が笑いながら瑠実の額を軽くつついた。
「どうせ私は実利主義です」
「現金主義でしょ」
香奈子が訂正する。
「私は電車でいいわよ」
美咲は机の上に広がっていた企画書や資料を重ねていった。
「えー、そんな経済力のない男でいいの？ 私のダーリンなんて立派なベンツだよ。男はやっぱり外車じ

やないとね」

瑠実は自分の車でもないのに自分の事のように自慢気だった。

「でもクリスマスいっしょにいてくれなかったんでしょ」

香奈子が入り込む。美咲は思わず笑ってしまった。

「あー、香奈子お姉さんそれはナシ！ あー傷ついたー！！」

瑠実は大げさにテーブルの上に身を投げ出すと美咲が重ねていた資料を崩してしまった。

「あ！ もう～」

美咲はまた資料を一つ一つ集めていった。

「ごめんなさい、美咲姉さん」

瑠実も手伝うふりをした。

「で、その代わりにヴィトンのバッグはどうなったんだっけ？」

香奈子が楽しそうに言う。

「またそれというか～ 結局口約束だけだったのアイツは！」

と瑠実が再びテーブルの上に身を投げ出して片付けたばかりの資料を崩した。

「約束を守らない外車男より約束を守る電車男よ、ほら瑠実そこどいて」

美咲は呆れて資料をまた拾い集めていった。

■キスの手前

千鳥ヶ淵 2010年4月3日(土)

4月3日の土曜日。

春風というよりはまだ冬風のような冷たいけれど爽やかな風が吹き抜ける。

桜満開に相応しい晴天である。

美咲と直人は共に千鳥ヶ淵へ桜を見に歩いていた。

皇居のお堀りにはお年寄りから子供まで普段職場で見る事のない様々な年齢の人たちが共に歩いていた。

「直人さん、あれ乗るのどう？」

美咲は皇居を囲む丘の上から下に流れる川の上のボートを指差す。

「いいけど揺らさないで下さい」

「えー、私はそんないじわるしないのにー」

美咲が笑いながら直人の腕をひっぱる。

「えー、いつも違うような気がしますが」

「本当、本当！」

二人はボート乗り場の方へ軽い駆け足で降りていった。

美咲と直人は他のボートと共に静かな波の上に浮いていた。

直人がオールを漕ぐ。直人の強い呼吸だけが聞こえてくる。

美咲はなぜか照れくさい感じがして直人と目を合わせなかった。

しばらくするとボートが満開の桜の下に来た。

「うわー、やっぱりここから見ても桜がキレイ」

「美咲さんの方がキレイですよ」

「直人さん、うまい！ 何も出ないですよ」

「え、出ないんですか。でもねアンプレッションの新しいコスメのCMとかに合いますよ」

「私がCMに！？」

「いや、美咲さんじゃなくて、この桜風景が」

「あ、いじわる。そんなこといっていると揺らしますよー」

「ダメです、絶対に。観覧車と同じくらいイヤです」

直人は楽しそうに強くオールを引いた。

「きゃ」

美咲が少し後ろに反り返った。直人が美咲の腕を掴む。

「ほら」

直人が笑う。

いつの間にか二人のボートは他のボートの群れから外れていた。
直人はオールを置くと向きを変えて美咲の隣にすわった。

二人は横に並んだまましばらく静かに共に桜と空を見上げていた。
青い空の中に桜の花びらが静かな雪のように漂っている。
二枚の桜の花びらが美咲の手の平の上に舞い降りてきた。まるで父と一輝が二人で美咲の手の平に訪れて来たかのようだ。

美咲は思わず手の平の上の花びらを見つめる。

「美咲さん、時々、悲しそうな顔をしますよね」

直人の声のトーンからみると、勇気を絞ってそう言ったというよりは、困り果ててそう言ったように聞こえた。

「……」

美咲は花びらから目を離さないで切り出す。

「ねえ、直人さん」

「美咲さん」

直人が間髪入れずに美咲の言葉をさえぎる。

「うん？」

美咲は花びらののっている右手を軽く握りしめながら直人の方を見た。

直人は少し緊張しているのか肩に少し力が入っているようだ。美咲は何気に左手を頬に軽くあてた。

「美咲さん」

「はい」

美咲の髪が風の中で軽く踊る。

直人は軽く咳払いをすると切り出した。

「今度から直人さんじゃなくて直人でいいですか？」

「え？」

「あの、だからさんづけじゃなくて、直人って」

美咲は思わず握っていた手を広げた。二つの花びらが手の平の上から舞っていった。

しかし美咲はそれにも気が付かなかった。

「あ、はい。直人さんじゃなくて、直人…、で、いいんですか？」

「はい、直人って呼んでください」

「はい、分かりました。直人」

美咲は直人の目をまっすぐ見つめながら微笑んだ。

改めて「さん」を取るとなんだか照れくさい。

美咲は左手で耳たぶを摘みながら水面に踊る花びらに目をやった。なんだか胸から熱いものがこみ上げてきた。最後にさん付けで呼ばなかった男性は誰だったのだろうか…。

「ねえ、直人。直人は忘れられない恋人っているの？」

まさかそんな質問をされるとは思っていなかった直人は少しうろたえた声で返事をした。

「そ…うですね。少し恥ずかしいけど、学生の頃につきあっていた彼女とか、ですか」

「その人とのラブレターとかって今でも読み返すことある？」

美咲が花びらから目を上げて直人の目を見つめる。

「というか、僕たちってラブレターとか手紙を書かなくなった最初の世代だと思うんですよ。ヤフーBBが入ってきたのも学生の頃だったし。だから最初からメールじゃないですか」

「そうか、ブロードバンドじゃなくて電話回線だったもんね。私は断然ピッチでメールばかりだったけど」

美咲は懐かしそうな顔をして花びらをつまんで目の位置に運ぶ。

「だからラブレターも紙じゃなかったな」

「そうか、じゃあ直人の携帯にもラブメールが入っているのかな？」

「…かも、しれないですね」

「直人さんはそういう昔のメールが入った携帯を今でももっているの？」

「うんー、さすがにないかな…。美咲さんは？」

「女の子はみんな一つは過去携帯を持っているものなの」

「過去携帯？」

「そう、過去のメールとか写真とかが入っている思い出の携帯」

「へー、そうなんだ」

直人は臍に落ちたような顔をしながら宙に舞っている花びらをつかんだ。

「美咲さんは今でもその過去携帯のメールとかって見るんですか？」

直人が美咲の顔を見ると、美咲は「どうなんだろう」といったような顔をして肩をすくめた。

「え、もしかしてあのJフォンが…？」
するといきなり美咲は「それー！」と喋ってポートを左右に揺らした。
「うわ、やめて、酔っちゃいますから！」
「高所恐怖症だけじゃないの？」
「いいからやめて下さい！ 美咲さん！」
二人の楽しそうな声と共に千鳥カ淵の上を桜が舞っていた。

目黒川

目黒川は昔は品川と呼ばれていて、河口付近に港があり文字通り「品」が行き来する「川」であった。今は品が行き来する事はなくなったが、多くの人が見花シーズンになると目黒川の歩道を行き来する。
美咲と一輝は皇居から中目黒の方へ出てきた。二人とも多くの人の中に紛れて中目黒駅の改札を出ると目黒川へ向かった。川の両端には商店街のちょうちんがずっと続いている。

「ね、夜桜も綺麗でしょ」
美咲が得意そうにいう。
「中目黒に住んでいるから、ここら辺のことならまかせて」
「いい所ですね」
直人は上を見ながら歩いている。
美咲は目黒川に架かる橋の上で立ち止まると川の奥の方を見つめた。
街灯が手前の桜を照らし、その下は黒い川が奥まで続いている。
美咲は橋の柵のより前に顔を出して桜のトンネルの暗い奥を見つめながら直人に語りかけた。
「子供の頃ね、お父さんに夜桜を見にここに連れてきてもらった事があるの」
「美咲さんここで育ったんですか？」
「ううん、うちは実家が福岡だから。でも私が小学生の時に家族で東京まで旅行で出てきたの。品川のプリンスに泊まっていたんだけど、目黒川の桜が東京の名所だからって…」
「へえ」
「でもね、お父さんはその後私が高校の時に病気で亡くなってしまったんだ。だから大学でこっちに出てきた時、最初からここに住もうって決めていたの。お父さんとの残り少ない思い出の場所だから…」
気が付くと美咲の頬から涙が一筋流れていた。
「ここにすればまたお父さんに会えるかなって…」
美咲は下をうつむいた。涙が頬を離れて道に落ちる。美咲の方は小刻みに震えていた。
その時、美咲は右手に暖かい感触を感じた。直人の手が美咲の手の平を包み込む。
直人は何もいわずに横に立っている。美咲も何もいわずに直人の手を握り返す。
全ての神経が手に集中する。マンガかと思うほど自分の胸の鼓動が強くなるのを感じた。
(男の人の手って暖かいんだ)
美咲が突然直人を意識した瞬間、
「美咲！ ずっとオレがいつしょだからな！」
一輝の明るい声が美咲の中で鳴った。
美咲は思わず直人の手を離して自分の胸に手をあてた。
(なんでここで一輝がでてくるの…)
美咲は視線を自分の手に向ける。胸はドキドキする。
直人が手を美咲の腰にまわし引き寄せる。
「美咲さん」
静かな声でそう言うと美咲に顔を近づけてきた。
美咲は思わずうつむいた。
直人は腰に回した手を離し、美咲の髪をなでておでこにキスをした。
「そろそろ、ご飯いきましょうか。美味しいところ、連れてってください」

春はまだ先 2010年4月12日(月)

「美咲、美咲！」
「え…？」

美咲はパソコンを見つめていたが香奈子の声で目をあげた。
「何か考え事でもしてたの。堀口さんとのデートのことかな？」
香奈子が横の開いている席に座っていた。
「え、ちがうよ」
「ふーん」
香奈子が腕組みをしながら信じてないわよといった顔でからかったようにこっちを見ていた。
「っていうか、私少しかへこんでいるかも」
そういうと美咲は企画書をテーブルの上においた。
「なにに、本当は何かいいことでもあったんじゃないの」
「ちがうわ。直人とちょっといい雰囲気になったんだけど」
「え、直人！？ さんづけじゃなくて？」
香奈子がからかう。
「もうそんなこといいから！」
「えー、で、やっちゃったとか」
「キスの手前でダメだったの。直人さんを意識した瞬間、一輝を意識しちゃって…」
「えー！ また一輝なの。もうあれこれ10年前だよ。一輝だっといういかげんにしろっていうよ」
「うんー。頭では分かっているんだけど」
「ま、でもね、30過ぎて恋愛で悩めるだけいいんじゃない。私なんか結婚しちゃったらロマンのかけらもないから」
「えー、そんなものなの？」
「そんなものだよ。恋愛感情だけじゃ夫婦は続かないもん」
「へえー、これはこれは、コンサルの先生みたいですね」
美咲が香奈子を茶化す。
「それより次のプレゼンは3日後だから。あのアメリカのアパレルメーカーの広報戦略」
香奈子が美咲のテーブルの上から企画書を取りながらめくる。
「そうなの、昨日もタクったの」
「じゃあ堀口さんにも連絡とってないんだ」
「聞かないでー！ なんかあれから気まずくって電話もメールなしで一週間以上たっちゃった」
ガッカリしたように美咲はいう。
「ダメだよ！ ちゃんとママに連絡はとらないと永遠に彼氏できないよ」
「えー、やだー、香奈子が連絡して」
「何いっているの。広報のプロなんですよ。ちゃんと自分のPRぐらい自分でしなさい」
香奈子は眼鏡のフレームに手をあてるとニコリと笑って席を立った。
「あー、もうどうしよう」
美咲は企画書をバサッと膝の上に置いた。

ゴールデンウィークな海 2010年5月 イメージ曲： Mistakes Like These - Mithgy Six ninety

5月とはいえまだうっすらと肌寒い感じがする。
そのせいかゴールデンウィークとはいえ鎌倉の海の浜辺には人が少なかった。
後ろを見ると遠くに青々とした山があり、前を見るといかにもシーズン前といった感じの落ち着いた海がある。
海の遠くで小さな人影が波の上に乗っている。
「ゴールデンウィークに誘って大丈夫でしたか？」
直人の髪が潮風に吹かれている。
「こっちこそ、声かけてくれてありがとう。あの後、お互い連絡とれなかったし」
「美咲さんは旅行とか実家にはいかないんですか？」
「ほら、うちは実家が福岡だけどいつもお正月とお盆の時しか帰らないの。本当は香奈子と温泉に行こうかって話してたんだけど、ダンナさんの実家に行く事になって。それでおいていきぼりかな」
美咲は笑うと靴を脱いで波際の方へ歩いていった。
「わー、冷たい！」
「まだ夏じゃないですから」
「夏になると人が押しかけてロマンチックなんてもんじゃないもんね」
「でも、相手が僕だったらロマンチックでしょ」

直人が真面目な顔をして美咲を覗き込む。美咲は頬が少し赤くなった。

「うんー、なんて答えようかな」

「あ、そういうこというんだ」

直人は美咲の両腕を掴んで動けないようにする。冷たい波が押し寄せる。

「キャー、冷たい！ 直人！ 離して！」

「海が見たいといったのはどっちでしたっけ」

「えっとね、直人じゃないかな」

「あ、このまま泳ぎますか！」

直人が美咲の腕を掴んだまま波の方へ歩いていく。

「お願い！ 離してー！」

二人は砂浜の上に座っていた。

「あーあ、濡れちゃったじゃない」

美咲のショートパンツが少し濡れていた。

「美咲さん、素直じゃないからですよ」

直人が笑う。

二人は押し寄せる波を見ている。直人が手で砂をすくっている。

「美咲さん、これ本に書いてあったんだけど、波って一分に18回押し寄せるんです」

「へえー」

「それが波のリズムなんです」

美咲は波のことを考えていたら突然一輝との会話を思い出した。

「美咲、知ってるか。波は潮の流れが陸にぶつかる時に起こるんだ。だから海の真ん中では津波は起きないわけさ」

いつもながら一輝は得意気に説明する。

「で、もっとすごいのは、潮の流れは大きく分けると北半球と南半球では方向が逆なんだよ」

大学のキャンパスで一輝はサンドイッチを頬張りながらさらに興奮していった。

「なぜか分かるか？ 地球が自転で回っているから水はその影響を受けているわけ」

そういうと紙に赤道の線を書き、その線を境に2本の円形の矢印を上下方向に描いた。

「で、ここからがスゴイんだ」

一輝は指を立てるとさもすごい発表をするかのようにいった。

「そんなわけで、北半球と南半球では水の渦の方向が違うんだ。日本では水が左回転で、オーストラリアは右回転っていうことなんだよ！」

そういうと一輝は世界を征服したかのような表情で腕を組んでみせた。

「ま、東京と大阪ではエスカレーターで立つ側が違うようなもんだな」

「それはかなり違うんじゃないの」

美咲は笑いながら突っ込む。

いつもながらスケールの大きい話から必ず日常の変なところに話が落ちる。美咲はそんな一輝の話が好きだった。

「直人、知ってる？ 日本とオーストラリアではトイレの流れが違うんだって」

「え？ そうなんですか」

波の話からいきなりトイレの話になったので直人はキョトンとしていた。

「うん、北半球と南半球の潮の流れと関係あるんだって」

「何かで読んだんですか？」

「一輝が」

「一輝？」

「そう、私の昔の彼氏。学生の頃だけだね。いつも不思議なことばかりいっててね。フジテレビの中に宇宙船があるんだとか」

「アハハ、確かにあの丸いのは宇宙船みたいですね」

「あとね、国家の緊急非常事態には電信柱が合体してロボットになるとか」

「アハハ、すごい想像力。CMのクリエイティブにしたらおもしろいな」

直人は笑った。

「一輝も宣伝の企画とかやりたいっていついたの」

「で、その一輝君とはどうなったんですか？」

美咲は一瞬表情が硬くなった。

「うん、もう学生の頃の思い出だからね。昔の話」

「でも、学生の時から付き合ってた人と結婚した人って結構いますよね」

「……」

直人は美咲の沈黙から気まずい雰囲気を感じて話題を切り替えた。

「まあ、学生の時の交際相手と途中で別れると、後は仕事か飲み会しか出会いがないんですよ」

直人はつぶやくと頭を掻きながら美咲の方を向いた。

「実はそれボクの事です。去年のクリスマス前に彼女と別れちゃったんですよ。しかも学生の時からずっと付き合っていた彼女と…」

「え？ 冬に私と会ったあのクリスマスのことですか？」

「いやー、まいっちゃうよね。なんで女性ってクリスマスの前に別れようなんて言うんでしょうね。クリスマスの前にですよ、本当に…」

直人は気まずそうに軽く苦笑いした。

「そうね、クリスマスって女にとっては決算日みたいなものだから」

「決算日ですか？」

直人がポカンとして美咲の方を見る。

「ほら、一番ロマンチックな日だから、その後の関係性も確かめたくなるものなの」

「で、男がコミットしないと見切りをつけられちゃう…かな」

直人は参ったという顔をしながら手で首の後ろを強く押していた。

「というか、あの時は彼女に対して自信が持てなくて…」

直人は落ち着かなくなってきたのか立ち上がった。美咲もつられて立ち上がる。

「彼女はなんでもステータス志向だったんですよ。キャリアも持ち物も…。で、自分もそうじゃなくちゃいけないのかなって…。10年間付き合ってきたはずだったんだけど、いつの間にか二人の価値観にギャップを感じてしまっていて…なんかズルズルですよ」

直人は靴を手に持つと水際の方まで歩いていった。

「で、気が付いたんだけど、仕事とか飲み会での新しい出会いって初対面から名刺とかで判断されちゃうような気がして」

直人の足を波が洗っていく。

「だからあのクリスマスの時、美咲さんに会った時に新鮮だったんですよ」

「出会いというより事故でしょ」

「でもほら、名刺交換が最初になかったから」

直人はポケットに両手を入れて笑いながら足元の波の泡を見た。

「多分、学生の時だけなんだろうな。利害関係なく純粋に付き合えるのは」

美咲も直人の方まで前に出て行った。

「あー、でもそうやって結局私も三十路過ぎちゃったな…」

美咲はため息をついた。

「大丈夫、僕でケリをつければいいじゃないですか」

「それって優しいお気遣いですか。それとも励ましですか」

「両方です」

「若いのに生意気ね」

「それぐらいじゃないとお姉さんの気は引けないから」

「あ、年上のおばさんっていいの！」

二人は笑いながら砂浜の上に寝転んだ。

雲の早さで

二人は海の上の空を見つめていた。

雲のスピードと同じほどゆっくりと時間が流れているみたいだ。

「ねえ直人、人を好きになるってどういう事だと思う？」

「うーん、簡単なようで難しい質問ですね」

「若い時はたんに好きで済んだけど、30過ぎると結婚を意識するじゃない。改めて人を好きになるってどういうことかなって」

「分かるなー、それって。多分、人を好きになるって、二人の大人がお互いを受け入れるって事じゃないですか」

「あ、香奈子も同じような事をいっていた」

「恋愛って平等な関係だから、お互いのアイデンティティを受け入れるっていう事だと思うんですよ」

「恋愛からアイデンティティの話か、深いなー」

美咲は溜め息をついた。

「で、」

直人は少し間をおくと続けた。

「前に付き合っていた時は、自分は平等な関係じゃなかったから失敗しちゃったんですよ」

「平等な関係？」

「なんとかして彼女に合わせれば、彼女も変わってくれるんじゃないかって、変な期待をしちゃったんですよ。そして結局最後には自分が疲れちゃったみたいなの…」

「そうだったんだ」

「その時に思ったんです。人を変えることは出来ないから、そのままを受け入れることしかできないんだって」

「なんか分かるな、それ」

「でも、相手を受け入れるには最初に自分を受け入れないといけないんだって気が付いたんですよ」

「自分を受け入れるか…。不思議、相手を受け入れることばかり考えていたから」

「結局、相手の存在に依存する恋愛は愛じゃないですよ」

「どうして？」

「だって、両思いになれなかったらそれは愛ではないということになるでしょ」

「難しいなー」

「だから人を好きになるって難しいことだなんて」

「確かに」

「でもあの夜、美咲さんに会った時になんか安心できる自分がいたんですよ。あの後ずっと気になっている自分がいて」

「なんで安心できたの？」

「うーん、あの古い携帯を大切にしていたところがかな…。」

「……」

「多分ずっと物とか人を長く大切にするんだらうなって思って。一瞬の間だったけど」

「ありがとう、直人」

美咲は両手をお腹にあててその手を見つめていた。

夕方になり日も沈んできた。赤い空を見ながら美咲は直人の胸に寄りかかりながら直人に聞いた。

「直人は、もし過去に戻ってやりなおせることがあれば、って思ったことある？」

「あの時、こうしなければよかったかと思うことですか？」

直人は水平線の向こうの雲の中に答えを探そうとしているようだ。

「そうですね。あるとしたら学生の時にあの子に告白しておけばよかった、とかかな」

直人は水平線を見つめたまま続ける。

「でもね、あれをやらなければよかったとかって後悔することはないかな。自分の間違いであれなんであれ、その時は多分必然だから起きたと思うんですよ。人生には無駄な事なんてないから」

「そうか、直人は前向きだね」

「ほら、その時は良かれ悪かれ偶然だったと思うかもしれないけど、物事には全て理由があると思うんですよ」

「嫌な事や不幸なことにも？」

「うん、いい事も悪い事も、全てひっくるめて」

「そうかー」

美咲は深くて長いため息をついた。

「あれ、僕何かいいましたか？」

直人は寝たまま美咲の方を向いた。

「ううん、なんでも」

美咲はつとめて明るく答えた。

直人には美咲が涙を浮かべているように見えた。

そしてその涙を運ぶかのように潮風が頬をなでていた。

直人は急に美咲が愛おしくなり美咲の手をとった。

「美咲さん」

「はい」

「僕と付き合ってくださいか」

「はい、私でよければ」

直人は美咲の手を強く握った。
二人はそのままそよ風がゆっくりと運ぶ雲をずっと見つめ続けていた。

■美咲への距離

梅雨 2010年6月

どうして6月はこんなに雨が降るのだろう。
そう思いながら美咲は日曜日の午後、部屋で想いでの携帯を見ていた。
画像をパラパラとめくっていると一輝とのツーショットが出てくる。初めて二人で撮ったものだ。
日付は6月22日となっており、10年前の美咲の誕生日の日である。

「美咲、誕生日プレゼントはこれね」
直人がビックカメラの携帯コーナーでJフォンの新製品であるSH-2を手にとった。
「わー、すごい！ 写真が撮れるんだ。本当にいいの、一輝。」
美咲は驚きながら携帯の画面ごしに一輝の顔を映していた。
「これでお互い写メールもできるんだよ」
「うわー、写真もメールで送れるんだ。一輝、毎日送ってよ！」
「美咲もシャワーの後とか送ってよ」
「もー、何いってるの！」

美咲は軽く一輝の額を叩く。一輝は愉快そうに笑っていた。
二人は新しい携帯を受け取るとマックに入った。
学生で混雑している中、二人はテーブルでお互い写真を撮りあたりして、新しい携帯で遊んでいた。
一輝は自分の携帯で一生懸命にかをやっていたが、美咲は自分の携帯にツーショットのプリクラを貼っていた。
突然、一輝が何か思いついたようにコーラをテーブルに置くと、「貸して」といって美咲の携帯を手にとった。

「何やってるの？」
「着メロのダウンロード」
「なんの？」
「ミスチル」
「なんで自分の携帯でしないの？」
「いいから、いいから。オレが課金されないため」
一輝は笑いながら携帯のメニューをいじっている。
「いいか、この着メロをクリスマスの夜9時に鳴らすように設定したから」
「まだ夏だよ」
「いいの、いいの。はい。これで二人のクリスマス、予約ね」
そういうと一輝は美咲に携帯を返した。
「で？」
「二人でクリスマスにこれを聴くの。これがオレからの美咲への誕生日プレゼント」
「変な一」

美咲は一輝のいっていることがよく分からなかったが、なんとなくおかしくて笑ってしまった。

画像を適当にめくっていると美咲の横顔のショットがでてきた。一輝が撮って送ってきたものだ。美咲は白い空をバックに遠くを見つめている目をしていた。
美咲はふと携帯から顔を上げると窓を見た。雨の勢いが強くなっている。
大粒の雨が窓を叩きつける音がする。
美咲は9年前の受信メールリストを上下する。ふと指が止まる。

件名： 2000/11/29（水） 23:37 マジうれしい！

本文： オレ美咲の分もお腹の赤ちゃんの分も頑張るから！ ずっといっしょだよ！ Kaz

「えーっ！？ 美咲、マジっ！！??」
一輝が喫茶店の席でいきなり立ち上がり椅子が後ろにひっくりかえった。
ガタン！と大きな音がして店内の客の視線がこっちに集まる。美咲は恥ずかしくなってしまった。
「で、で、どれくらいなの!?!」
「うん、お腹の赤ちゃん、2ヶ月目だって」
「マジで!!!! オレの子供か!!!!」
美咲は気まずそうにテーブルを見ながらか弱い声で聞いた。
「大丈夫なの…?」
「あったりまえさ!!!」
「でも私たちまだ学生だよ」
「何いってるんだよ!! オレだって赤ちゃんが生まれる頃は社会人だよ!! まかしとけて!!」
「でも直人のご両親なんて言うかな…」
「何いってるんだよ! 母ちゃんなんて出て行ってからいないようなもんだし、父ちゃんだって寂しいから喜ぶさ!」
「うちのお母さんもずっと母親一人だったから家族が増えるのはうれしいって言ってくれて」
美咲はコーヒーカップを両手に持った。
「だったらいいじゃん! 普通ならドヤされる状況かもしれないけど、両方の親が承諾してくれるんなら!」
一輝の強気な発言がなんだかおかしかったのと、少し安心したのとで美咲は微笑んだ。
「そうか、一輝の子供で本当に良かった」
「いやー、ぶっちゃけかなり驚いたけど、でもなんかウキウキするな。美咲もちょうど生まれる前に卒業できるし。オレは希望の広告会社に内定決まったし。卒業したらすぐに式あげよう」
「うん、ありがとう。しっかり稼いでね、パパ」
「パパ!? パパかー! うんー実感湧かないなー」
一輝が豪快に笑う。
「え、ちょっとお腹の赤ちゃん触らせてよ、どれどれ」
一輝がテーブルごしに手を伸ばす。
「やめてよ。まだそんなお腹が大きいわけないでしょ!」
一輝はそうかという顔をすると真面目な顔で言った。
「で、男の子か女の子はいつ分かるんだっけ? 名前も考えないとな」
「4ヶ月ぐらいしないと分からないみたいだよ。だから、えーっと、1月には分かるんじゃないかな」
「美咲は体調どうなの?」
「ちょっとつわりがあるけど、大丈夫。お医者さんがいうには妊娠後3ヶ月までは不安定だから流産にならないように大事をとれって」
「そうかー、そうなんだ。じゃあ、美咲、学校休め」
「それぐらい大丈夫。ただ用心とって一輝といっしょにバイクには乗らないようにしないとね」
「あ、そうだよな、事故ったってお腹の赤ちゃんにはヘルメットかぶせられないもん」
「アハハ、一輝いつもおかしいね」

美咲が昔の携帯を見ていると、いつも使っているドコモの携帯が鳴った。
美咲は古いほうの携帯の電源をあわてて切って新しい方の携帯を手にとった。
「こんばんは、直人です。今大丈夫ですか?」
「うん、大丈夫よ」
「22日って美咲さんの誕生日ですよ。その週末空けておいてもらえますか? 特別料理を用意しますから」
「特別料理?」
「そう。楽しみにしててください」

美咲の誕生日 2010年6月26日(土) イメージ曲: Little Bit - Lykke Li

次の週末、美咲は直人のところへ向かった。
中目黒から恵比寿で山手線に乗り換えて新宿から代々木上原まで。直人は代々木上原のマンションに住んでいた。

美咲がドアのベルを押すと直人が「いらっしやい」といって向かい入れてくれた。
キッチンで何やら料理をしている感じだ。
「今日は美咲さんのために手料理です！」
「わー、スゴイ！ 直人、料理できるんだ」
「といっても簡単なカレーだけですけど」
「私も手伝うよ」
「大丈夫です。美咲さんはここでゆっくりしててください」
「えー、でもそれじゃあつまらないから」
「じゃあ、野菜は切れますか？」
「もちろん！ 私だって将来は立派なお嫁さん候補だよ。料理ならまかせなさい」
「どれくらい先の将来ですか？」
直人は笑いながら冷蔵庫からサラダ用の野菜を取り出した。
「失礼ね！ 私はそんなに仕事人間に見える？」
「いえ、そんなことはないです。ただ」
「ただ…？」
「うーん、時々、張り詰めたような表情をしていますよね」
「え、私が？ そんなテンパっているように見える？」
「いえ、テンパっているというよりは…、ま、そんな話はどうでもいいですね。これをお願いできますか？」
そう言うと直人はアブカドとトマトを台の上に置いた。
「で、アブカドとトマトの刻んだやつをサラダに混ぜて、後でチャイニーズパセリをのせます。美咲さんは香菜は大丈夫ですか？」
「私もエスニック好きだから、香菜は好きだよ」
「結構おいしいですよ」
美咲はアブカドを種に沿って包丁を入れ、二つに割ると手を止めた。
「何か考えごとですか？」
「ねえ、直人は考えたことある？」
「ん？」
「幸せって何かな。瑠実はいつも合コンに力入れていて、新しい恋愛を探しているの。で、香奈子は結婚しているけど恋愛感情だけじゃ夫婦は続かないっていうの」
「つまり、美咲さんが言っているのは、幸せは誰かがいるかいないかによるのでは？ といいたいのかな」
「うんー、そういわれちゃうとそうなのかな」
「みんな幸せの指標を自分の外に求めるんですよ」
「幸せを自分の外に？」
美咲はキョトンとして包丁をまな板の上に置いて直人を見た。
「そう、自分の外に。例えば、マイホームがあれば、車があれば、お金があれば、恋人がいれば」
「確かにそうね」
「でもね、幸せは自分の心の状態なので、自分の心が満たされなければ、いくら外見を満たしても満たされないんです」
「そんなものかな」
「美咲さんは世界の大半の人がマイホームもマイカーも持てないのをご存知ですか？」
「私も今の部屋は借りているし、車はないから同じかな」
「だとすると美咲さんはこのまま一生幸せになれませんか？」
「なるほど。じゃあ、直人のいう幸せはなんなの？」
直人はカレーの鍋をかき回している手を止めた。
「はっきりいえないんだけど、多分、今のままで自分は何も不足していないと感じられることじゃないかな」
「何も不足しない状態？」
「貧乏だから幸せなれないといってしまうと、地球の大半の人は一生幸せになれないですよ。逆に日本は豊かになったけど、今だに日本人はまだ分からない幸せを掴むために毎日走っていますよね」
「ま、貧乏も困るけど、お金持ちだからいいっていうわけでもないか」
美咲もお金を持っていないが幸せでない人の話は聞いたことがある。
直人はまたカレーをかき回しはじめた。
「幸せって、人や物に依存するものじゃないんですよ。前いったように天国が自分の心の中にあると考えるのであれば、幸せも自分の心の中にあると思いますよ。でもみんな外を探すのに忙しくて忘れるんです」
美咲には直人のいっていることの真意を完全に理解することはできなかったが、言葉に深い響きを感じた。
「他の人と比べているとキリがないんですよ。だから、とりあえず今、自分の目の前にある人生に取り組

む。そして結果に対していちいち後悔しない。っていったらちょっとかっこいいですか？」

直人がちょっと照れながら笑った。美咲にはその笑顔がとても眩しく感じられた。

「じゃあ直人は私がいなくて、独りでも幸せなの？」

「もちろん美咲さんがいた方が幸せです。でも僕自身が一人でも幸せじゃなかったら、美咲さんも幸せにはなれませんよ」

「え、どうして？」

「だって幸せじゃない人が二人くっついても幸せにはなれないでしょ。幸せな人同士がくっついてより大きな幸せができると思いませんか？」

「直人っていつも深いよね」

「というか、前の彼女と付き合っていた時、彼女といっしょにさえなれば自分は幸せなのって強く思っていたんですよ。で、結局自分の想像する幸せな状態になったら、結構辛かったんですよ」

「そんなものかなー」

「そんなものです。あれ、アブカドは進んでいますか？」

直人は少しからかう感じでいった。

「直人…」

つぶやくように美咲は言った。

「はい」

二人は台所の流し台で並んで立ちながら見つめ合った。

美咲は直人に見つめられた瞬間、直人の常に人生に真っ直ぐに取り組むひたむきな瞳に強く惹かれていった。直人の黒く澄み切った瞳の中には若い純粋さと熱意が宿っていた。

(瞳の中に吸い込まれるってこういうことをいうんだ…)

美咲はそのまま目を閉じた。

二人は深いキスを交わした。

幸せは今この瞬間の中にあるのかもしれないと美咲は思った。

台所は静寂に包まれ、美咲の握っていた包丁がまな板の上にコトツとあたる音だけがした。

七夕 2010年7月7日(水)

「子供の時によく短冊に書きましたよね」

直人が懐かしそうにいった。二人は西麻布の交差点にある権八の3階で食事をしている。

「直人、知ってる？ ここはブッシュと小泉が会食して有名になったところなの。下は映画のキル・ビルの舞台にもなったの。お店にとっては一番のPR効果だよ」

「さすが広報ですね」

「でね、ここの3階は下と別の入口になっているの。だからみんなあまりよく知らないの。今夜は七夕だから空が見えるところがいいかなと思ってここにしたの」

「美咲さんはいいお店いつも知っていますよね」

「女同士の方がよく食べにいくしね。男はどうせ合コンで同じようなところでしょ」

「え、僕は合コンあまりしないですよ。美咲さんもいるし」

直人が少しムキになったので美咲は笑った。

「で、直人は昔、短冊になんて書いたの？」

「うんー、織彦と織姫がちゃんと会えますようにって」

「えー、かわいい〜」

二人は笑った。

「でもね、子供の時になんとなく不思議だったんです。二人は愛し合っていたのに、当事者とは関係ない理由で会えなくなることが起きるんだなって」

直人はしんみりといった。

「前の美咲さんの話じゃないけど、ああだったら、ああじゃなかったらっていう話。分からないですけど、その時には理由はどうであれ、そうなるようになっていたんじゃないかなって」

「うん？ それはどう結びつくの？」

「もし世の中に偶然がなくて必然しかないとしたら、会うも別れるも必然なんだなって」

「……」

「だから僕と美咲さんもこうして今いっしょにいれるけど、二人の時間がどれくらい許されているかは、僕たちには分からないですよ。だから今こうやって目の前にある二人の時間に感謝しないと」

「そうね」

直人は何気なく思ったことを言っているだけだったが、美咲は自分の力が抜けていくのを感じていた。
「でも、誰がその時間を決めているのだと思う？ 神様？」
美咲の言葉に少しだけ力がこもる。
「どうかな…。神様がいちいち全ての人の出会いを管理するのも大変だろうしな。もしかして二人で生まれてくる前に決めてくるのかな…」
「え？ 生まれてくる前に決めてくるの？」
それはさすがに美咲も予期していな答えだった。
「それが運命っていうものなのかもな。だから美咲さんとこうしていれるのも生まれる前から決まっていたんだと思います」
「直人、口説くのが上手になったんじゃないの？」
美咲は笑いながら箸を直人に向けた。
「いや、そうじゃなくて」
直人も少し笑った。
「でもね、この地球に60億人。そして今こうやって二人でいるのは60億分の一の確立です。よく考えると奇跡的じゃないですか」
「確かにいわれてみれば！」
直人の言うことが少し一輝に似ているなど思いながら美咲は頷いた。
「七夕でいえばやっとうちやっとうち織姫に会えたっていうところかな」
「じゃあ、私は姫かな？」
「はい、お姫様です」
二人は見つめ合いながら微笑んだ。
「お姫様」
「はい」
美咲は少しはにかみながら答えた。
「姫はいつになったら心を開いてくれるのかな…？」
「え…？」
「こうやって美咲さんといっしょにいれるのはうれしいです」
「……」
「でも、僕だけかもしれないけど、時々壁を感じてしまう自分がいます」
「……」
「ほら、そうやって寂しそうな顔をする時。心に扉がかかっているような顔をしていますよ」
「直人、ごめんね。別にそういうわけじゃ」
「ううん、こっちこそごめんね。グチっぽくなっちゃって。もちろん美咲さんのことは今のままで好きです。ただ時々切なくなる時があるから。…歳のせいかな」
直人は力なく微笑むと焼酎のグラスを軽く振り、カラカラといわせた。

花火 2010年7月22日(金)

7月は花火大会のシーズンでもある。
美咲は直人と荒川の花火大会に行く約束をしていた。
中目黒から日比谷線にのりちょうど反対側の端までいくと北千住になる。
北千住の駅で直人と待ち合わせをしていた。
騒然とした多くの人混みの中から直人がYシャツ姿で手にグレイ色にストライプのジャケットを持ってやってくる。
「直人は仕事大丈夫だったの？」
「外で打合せだっけ書いてきちゃいました」
「私も」
「直人はいつも花火ここにくるの？」
「結構こって穴場なんです。他の花火大会って週末だけど、ここは平日だから。それ程混まなくて意外といいところに座れるですよ」
「あ、そうか、平日の花火大会って珍しいか」
「あとね、ここは河原だから、お台場とかの海と違って花火が近くで見えるんです」
「え、そんなに違うの？」
「違うってもんじゃないですよ。星が降ってくるっていう感じかな。じゃ、いきましょか」

二人は人混みの中を歩いてゆき、花火が上がるクレーンの近くの隙間に座った。

「ほら2本のクレーンがあるでしょ、ナイアガラの。花火自体はクレーンのところから上がるからこっちの方がよく見えます。しかも近いから花火が真上にあがるって感じです」

直人は上を指差した。

確かにいつも美咲が見ている花火とは違っていた。いつも海の向こうで上がる花火を花火だと思っていたが、河原の近距離で見る花火は格別だ。

「こうやって丸く破裂する花火は日本の職人しかつくれないんです。ニューヨークで花火みたことあるけど、ほとんど丸くきれいにいかないんです」

「直人っていろいろ物知りだね」

「たまたまテレビでやってたので。それより寝てください」

そういうと直人は横になった。

「ほら、ビッグバン」

「宇宙の？」

美咲もいっしょに横になって真上を見上げた。

真っ暗闇の中に突如光が円形に広がる。沢山の星がいっぺんに生まれて美咲の方へ迫ってくるかのようだ。続いて『ドンッ！！』と重たい音が続く。

「宇宙が始まる瞬間みたいでしょ」

「すごい。吸い込まれそう」

美咲は花火の迫力に目を見開いていた。

無数の光の線が中心から延びると二人を包み込み、そして消えた。何もなかったかのように。

「ね、スゴイでしょ」

直人が横を向いていった。

「うん、すごい」

「多分天国に行く時はこんな感じだと思うな。身体から抜け出れば光のスピードより速く移動できるだろうから」

「直人っておもしろいね」

二人の目が合う。

しばらく二人は見つめあった。宇宙の時間が止まったかのようだ。少なくとも二人の間の空間だけには絶対的な静寂さがあった。

花火の光が二人の瞳を照らす。お互いの瞳の中には二人だけの宇宙があった。

そのまま二人は宇宙遊泳かのようにゆっくりと顔を近づけると口付けを交わした。

帰省 2010年8月

なぜ人は混んでいると分かりながらいつも渡り鳥のように同じ時期に移動したがるのだろうか。美咲はのぞみのホームの列に立ちながら思うのであった。

お盆に入ると休みに入るクライアントも多いので、美咲も福岡の実家へ帰省するのが恒例だった。香奈子は飛行機の方が早いというが、のぞみでゆっくり行くのが好きであった。車窓から見えるトンネルの合間の山々の景色を見てみると、人生の一コマコマの合間に息をつけるような気がした。

実家は福岡にあるので、のぞみで博多に入り天神から七隈線に乗り、茶山駅で降りるとタクシーで実家に向かった。いつも中目黒での光景に慣れているせいか、住宅街の家の一軒一軒が大きくみえる。

タクシーのドアを開けるとクーラーが涼しい車内の中に熱気が入ってくる。そしてサウナのような暑さを倍増するかのようにはセミの音が盛んに聞こえる。

実家の玄関を開けると母親が向かえ入れてくれる。

「美咲、お帰りなさい！ お正月ぶりね」

「どこも混んどったけん、疲れたわー」

不思議なもので実家のドアをくぐると、東京では使っていない方言に切り替わる自分がいた。

「汗かいたやろ、お風呂入ったら」

「ありがとう。最初に父さんに挨拶」

美咲はそういうと居間に置いてある父親の仏壇に先行を立てると手を合わせた。

美咲は畳の上で木製のしっかりとした低いテーブルを触っていると実家に帰ってきたんだという実感がする。会話が静まると時計の音がカチャカチャ鳴っているのが聞こえる。

「あのファッションショーならテレビでも沢山やってたよ。美咲のお仕事だったの？」

そういうと母親がお茶を持ってきた。

「そうそう。ちゃんとお仕事も頑張ってるし」

「で、そんなことよりどうなん、新しい彼は？」

「うん、直人さんでいて、穏やかで優しい人よ。一輝とは違うタイプかな」

母親は急須からお茶を注ぐ。美咲は少し間をおいてからいった。

「ねーお母さん、私あの頃から変わったと思う？」

「美咲はいつでも同じ美咲よ」

「そうかな…」

「美咲、もう昔のことはいいんやないの」

「……」

美咲はうつむいてひよこ饅頭を手にとった。地元の名物なのに、わざわざ母親が好物だろうと買っておいでくれたのだ。

「どうしたん、美咲？」

「あの時に生まれてたかもしれん赤ちゃんの事を考えると…」

「美咲、美咲」

「うん」

「それは美咲のせいじゃなかよ。仕方がなかった事なんよ。生きていれば辛いことの一つや二つあるわ」

「……」

「昔、美咲に話したことがあるやろ。母さんも美咲が生まれる前に流産したことがあるんよ。きっとその子にとっては生まれてくるタイミングじゃなかったんよ」

「お母さんはその時どうしたん？」

「そりゃあもちろん悲しかったわよ。でもその後美咲のような素晴らしい子が生まれてきてくれたんやから。もしかしたらあの子がもう一度チャレンジして、美咲として生まれてきてくれたのかも知れないんね」
母親はうれしそうに微笑んだ。そして湯飲みを置くといった。

「でも美咲の場合は一輝くんがいなくなっちゃったけんね。でもあの時の赤ちゃんも次のチャンスを待っていると思うんよ」

「お母さん、時々不安になるん。お父さんも一輝もいなくなっちゃって。突然また大切な人を失うんじゃなかかって…」

「……」

母親は少し考えながら美咲にお茶を注いだ。

「そうそう、一輝さん、東京からわざわざ来てくれとったね。阿蘇山から見る星空がきれいだって感動しとったね」

「そうね、いつも自分の故郷は宇宙だっていっとったから」

「確かに一輝さんはめったにいないおもしろい子やったわ」

「まだ学生でまだお気楽だった時だったけん。あのまま私は結婚すると思っとったし。あの時が一番幸せな時やったな」

「美咲、あなたが勝手にそう思っとるだけよ。同じ時なんて永遠に続きやしないわ。今は今で美咲にあった幸せがあるはずよ。あなたが一步踏み出せばね」

「幸せってなんやと思う？ 愛する人がおることかな？」

「愛する人がおらんくても幸せと思えることよ。例えお父ちゃんがおってもね」

美咲はどう返したらいいか分からなかった。

「自分が幸せやなかったら、大切な人も幸せにできんとよ。お父ちゃんと一輝さんがおってもおらんくてもね」

「直人も同じこといっとったんよ。でも、私はお父ちゃんと一輝がいた頃が一番幸せだったんよ。…でもあの頃の自分には永遠に戻れん気がして」

「戻る必要はなかよ。いつまでも学生の美咲やないんやけん。美咲は今の美咲でいいんよ」

「お母さん、ありがとう」

美咲は涙を見せないように明るく微笑んだ。

■美咲の幸せとは

直人の誕生日 2010年10月10日(日)

午後の光が柔らかい黄金色に感じるようになれば秋は入口まで来ている。
入道雲がなくなり、空も高くなる。
花火でのキスも「夏の思い出」と感じた時に季節の移り変わりを実感する。
美咲はベランダにかけ布団を取り込んだ。

「いけない、もう4時だ。来ちゃうわ」
美咲は台所の鍋の蓋を開けてスープを確認するとテーブルへ向かった。
テーブルの上にピンクのクロスをひくと花をおいた。
横の本棚には直人と二人の写真が飾ってある。
時計が5時を指す。
ドアのチャイムが鳴る。
「はい」
「どうも」
「いらっしゃい！」
「今日はありがとうございます。白ワインでよかったですか？」
というワインを差し出した。

「じゃあ、今日は直人のお誕生日の二人だけのお祝いということで」
「乾杯」
二人はテーブルを挟んでシャンパンのグラスを鳴らした。
「直人もこれで31歳ね」
「まだまだ、これからです。美咲さんの歳に早く追いつかないと」
「何いってるの！」
二人は笑った。
「でも早いものね。付き合ってから半年になるかな」
「イベントの後からだから約半年ですね。でもね、僕の中では去年のクリスマスの時からですよ」
「本当かなー。あの広場で一目で何が分かったのかな」
「うん、Jフォンです」
という直人は笑った。
美咲は直人のために用意したメインディッシュをテーブルに持ってきた。
「わあ、おいしそう！ やっぱ女性の手料理は違うな」
「直人の口に合うかな」
テーブルの上にはサラダ、オードブルであるサラミとチーズが並んでいる。そして美咲の得意な貝の Pasta が真ん中に置かれていた。
直人は「全部おいしいです！」というフォークを手に持って話し出した。
「美咲さん、象と鼠の寿命の話って知っていますか？」
「え、知らない、知らない。教えて」
「象って何十年も寿命があるじゃないですか。でも鼠の寿命は数年なんですよ」
「そうかも」
「でも両方とも生きている間に心臓が打つ脈の数は同じなんです」
「つまり？」
「つまり、絶対年数ではなく鼓動の数からいけば象も鼠も相対的に生きている時間がいっしょなんです」
「へえー、それは知らなかった！ 直人スゴイ！」
「だから思ったんですよ」
直人が手に持っていたフォークを皿の上に置いてシャンパンを一口飲んだ。
「美咲さんの亡くなったお父さんや美咲さんが過ごしてきた他の人に比べたら、僕と過ごした時間は短いかもしれませんが、でも、時間の長い短いに関係なくいっしょに過ごしてきたこの一年は他の年数と同じだけの価値があるかなって。時間の量は仕方ないけれど質には変わりがないんだって」
「直人…」
「美咲さん、だからもう寂しい顔をして欲しくないんですよ。僕がいるから」
「ありがとう」

美咲はなんだか胸からこみ上げてきて涙が出てきそうになった。

食事が終わりテーブルも片付けた。

直人はベージュのソファに座っている

目の前のコーヒーテーブルの上には赤ワインの入ったグラスが二つある。

美咲はキッチンでなにやらやっていたが、いきなり部屋の電気を消した。

「じゃーん！ おめでとう、直人」

そういうとロウソクの立っているケーキを持ってきた。

小さめの円形のショートケーキにのっているロウソクの揺れる炎が部屋の壁に幻想的な影を演出する。

「31本は多すぎるから10本にしました」

ロウソクの頼りない光が二人の顔を照らし出す。

「ありがとう、美咲さん」

「はい、願いごとを！」

直人は少し考えていたが、「うん」うなづき、勢いよくロウソクを「フーっ！」と吹き消した。

美咲が電気をつけて拍手をする。

「ねー、何を願ったの」

「秘密」

「えー、私にいけないことなの」

「そ。秘密です」

「あ、そうしたら私も直人への誕生日プレゼント秘密にしちゃうから」

「え、それは」

「はい、お誕生日おめでとう！」

美咲はコーヒーテーブルの下から赤いリボンのついた箱を差し出した。

「ありがとう」

「開けてみて」

「はい」

リボンをとり、ラッピングを開いていく。

「何かなー」

「今から寒くなるから、直人の心を暖めてくれるもの、なーんてね」

「えー？ 暖めてくれるもの？」

直人は笑いながら箱の蓋を開けた。

見るからに暖かそうなオレンジ色の厚地のウールのマフラーである。

「ありがとう。暖かそうですね」

「とっても高いのよ！ 私が特別に選んだんだから」

美咲が軽く冗談っぽくいった。

「確かに。美咲姫に選んで頂いたものだから、さぞ高いことでしょう」

直人も冗談で返した。

「そう、姫からのだから高いぞー」

美咲はそういいながら直人によりそった。

二人の目が合う。

「さっきケーキでお願いした時ね」

「うんうん」

「この瞬間を永遠にくださいって唱えたんだ」

(永遠に?)

美咲と直人の目が再び合う。

直人と目が合うときはいつも永遠のように感じられる。

そして一輝の時もそうだった。

「いいか、美咲。目っていうのは魂の窓なんだ」

一輝は美咲の目を見つめながらいった。

「魂の窓？」

いつもながらおもしろい表現を使うなと美咲は思った。

二人は夜のベランダの上に立っていた。

「そう、だからこうやって見つめ合うと相手の瞳の中に自分が見えるんだ。魂はみんな宇宙でつながっているからね」

(相手の瞳に自分が見える？ 宇宙?)

美咲はさらにわけが分からなくなった。でも一輝はおかまいなしに続ける。

「つまり、目の中には宇宙があるから、こうやって見つめていると時間も場所も関係なくなるんだ。永遠だよ」

「一輝は永遠にいっしょにいてくれるの？」

「もちろん。宇宙船が向かえにこない限りはね」

「宇宙人が向かえにくるの？」

美咲は目をパチクリさせた。

「いずれくるさ。その時はオレが地球人代表だから」

「だったら私もついていく」

「おう、その時は地球一の美女代表ということで」

「あたりまえよ」

そういうと二人は笑った。

「で、お迎えはいつ来るの」

「流れ星に紛れてくるからね。こうやって毎晩見張っていないと分からないな」

「あ！ 流れ星だ」

「お迎えがきたかな。じゃ、美咲、さようなら」

「えー！？」

夏のベランダの上から夜空の下で笑い声が響いた。

目を閉じると イメージ曲： Everybody's Changing - Keane

見つめ合うと時が止まる。

美咲には一輝のいていたことがよく分かる。

美咲は今、直人の瞳を見つめている。

少なくとも今の二人の瞳の中には宇宙がある。ロマンチックという言葉だけでは言い表せない何かがある。

とても強い引力で二人は引き寄せられる。

そのまま二人は唇を近づけた。

一ミリ、一ミリ、お互いの温度が近くなるのを感じる。

二人の間の空間が消えるような感覚がした。そこにあるのは電気が交流するような感触のみであった。

二人は唇を重ねた。

直人が手を美咲の膝の上に置く。直人の優しさが手の温もりを通じて伝わってくる。

直人は美咲を抱き寄せる。美咲は腕を直人の首にまわした。

美咲は身体全体が暖かい毛布に包まれるような感覚に陥った。

直人はいっそう強く美咲を抱きしめる。

そしてそのまま直人は美咲の背中を愛撫した。

美咲は両手を直人の頬にあてた。

直人はキスをしながら美咲のワンピースの背中の中のフックを外す。

美咲は抵抗しなかった。

そのまま二人は宇宙の法則に従って身を任せた。

二人は床の上で体を重ねた。二つの宇宙が一つになる。

美咲は目を閉じた。視界は美しい暗闇になる。

美咲は懐かしい感触を覚えた。

そして驚いたことに、美咲が暗闇の中を泳いでいると一輝が現れた。

(なんで一輝なの…)

意識の中から一輝を拭いさろうとしたが、抵抗すれば抵抗するほど一輝の顔が鮮明に出てきた。

美咲は目を開こうとするが恐くて目を開けることができない。

まぶたに力が入る。

(どうして…。直人、ごめん)

直人の体を抱きしめながら、美咲は閉じた目の中で一輝を抱いていた。

美咲の閉じた瞳から一筋の涙が流れる。

直人はソファの上で自分の携帯を見ていた。

(あの涙はなんだっただろう…)

二人は愛し合ったばかりのはずである。なのに直人は何か腑に落ちないものを感じていた。

美咲は喜びが終わると無言で涙を拭きながらシャワーに入ってしまった。
「うれし涙でもないだろ…あれは」
直人は天井をなんとなく見つめながら、自分の部屋の天井とは違うなと考えていた。
直人がふと目をやると、ソファの横の台にある携帯が目に入った。
ワインレッド色の折りたたみ式の携帯は美咲がいつも使っているものだ。そしてその横にはストレート型のシルバーのいかにも古い携帯があった。直人はなんの気なしにその携帯を手にとる。
裏には古びたプリクラが一枚貼ってあった。まだ若い感じのロングヘアの美咲と威勢の良さそうな男子のツーショットである。
「これまだ電波入るのかな」
そういって電源を入れた。
プリクラと同様に学生風の若い美咲と男子の子が写っている画像が待ち受けにでる。
（これが一輝なのかな…）
直人は昔の彼氏が若干気にはなしたが、それよりも美咲の方に見入っていた。
美咲は楽しそうに大げさにウィンクをしていて、輝くばかりの笑顔をとたえて入る。
（へえ、学生の頃はもっとハジけた感じだったんだ）
その時美咲が部屋に入ってきた。
「あ！ ダメ！」
慌てて駆け寄ってくる直人から携帯を取り上げて電源を切った。
「ご、ごめん…、そういうつもりじゃ…」
二人の間に重たい沈黙がおかれる。
「勝手にごめんなさい。でもその美咲さんはカワイイよ。とても楽しそうで」
「だからダメなの！」
「別にそういうつもりじゃなかったけど。でももう10年前の話だよ」
「やめて！ もういいの！」
「もちろん過去の彼との思い出は大切だと思う。でも…」
直人は美咲といっしょに過去に引っ張られることに苛立ちを覚えていた。
「美咲さんの時間は10年前で止まっていますよ」
「もうやめて！ 全部、私が悪いのよ。一輝のことも、直人とのことも」
「一輝くんか…」
直人は首を横に振る。
「美咲さんの心の中を毎回彼が独り占めしているんじゃ、僕が頑張っても入る余地はないですよ」
美咲は何も返す言葉がなかった。
直人は何も言わずにジャケットをとり部屋を出て行った。
美咲は手に握られたJフォンを見つめながら顔を上にあげることができなかった。
涙があふれてくる。
10年前の幸せそうに笑っている自分の顔の上に涙の雫が落ちていく。

別れ 2010年11月

11月の半ばに入ると朝の風が急に冷たくなる。冬への入口だ。
美咲はコートを着て丸の内の駅を出ると街の中を会社へ向かって歩いていた。
朝日の中で茶色の葉がカサカサと揺れる音がする。
涼しい秋風が美咲の頬を撫でる。美咲はふと立ち止まり木を見上げた。

「美咲、今年のクリスマスは二人でガーデンプレイスのシャンデリアを見にいこう」
一輝が学校のキャンパスの紅葉の木のに座っている時に言い出した。
「みんなでパーティーじゃなくて？」
「何いってんだよ！ 携帯買った時にちゃんとクリスマスの9時にセットしてあげたじゃん！」
「え、そうだった？」
「えー、ショック！ 忘れちゃったの！ ほらこれ」
一輝は美咲の携帯を少し乱暴にとるとアラーム設定メニューに入っていった。

アラーム： 2000.12.24[日] 21:00 終わりなき旅 MR. CHILDREN

「ね！ちゃんと半年前から設定してあるでしょ」

「あ、本当だ」

正直、美咲はあまり覚えていなかった。

「これを二人でクリスマスの日にガーデンプレイスで聞くんだよ」

「えー、携帯の音を？」

「そ、学生最後の二人だけのクリスマスだから記念に。来年は子供もいるし」

一輝はうれしそうに笑った。

「だから美咲も夜の9時ピッタリに來いよ！ どお、オレってロマンティストだろ！？」

美咲は変なことでイバる一輝の顔がおもしろいなと思った。

「なんかよく分からないけど素敵だね」

「だろ！ オレの演出は天才！ さすが将来のクリエイティブディレクター！」

一輝そうは得意気にガッツポーズを決めた。

「後、お腹の赤ちゃんが冷えないように暖かい物着てこいよ！」

「大丈夫、分かってるって！」

美咲は会社の自分のデスクに何もしないで座っていた。

いつもと変わらない職場のはずなのに、パソコンの画面を見つめている自分に違和感を感じていた。

仕事が手につかず、窓際の所についてコーヒーを片手に立っていた。

外の都会は喧騒としているはずなのに、ビルの中には落ち着いた静かな空気が流れている。

美咲は窓の下に広がる小さなビルや人影を見て思っていた。

（この街の中には幸せな人も不幸せな人も同じぐらいいるのかな…）

「どうしたのポーとして？」

香奈子が横にやってきた。

「あ、ううん、何でもない」

「堀口さんとはうまくいっているの？」

「う、うん」

美咲は力なく答えた。

「ねえ、香奈子。今、好きな人がいても、前の人を忘れられないってことありえるのかな」

「うんーそりゃそうよ。瑠実なんていつも同時に沢山の好きな人がいるみたいだけだね」

佳奈子はおかしそうに笑った。

「でもね、美咲、別に前の人を忘れる必要はないよ。一人一人は大切だと思うよ。ただね…」

「ただ…？」

「もうすでにこの世にいない人のことに縛られて、今、目の前にいる人のことをないがしろにしてしまったら、もとも子もないでしょ。一輝くんもそんな美咲を見ていてうれしいと思う？」

「ううん…」

「大学の時、いつもあいつはいつも豪語していたよね。赤ちゃんができたって聞いた時も。オレが美咲の幸せを守ってやるんだ！って」

「一輝ったら、いつも大きい事をいったよね」

「で、美咲。今のあなたは幸せなの？ 一輝くんがもとで堀口さんとうまくいかないんじゃない、一輝も浮かばれないでしょ。いつまで経っても」

「ごもっとも。過去ばかり見てちゃダメだよ」

二人はそのまま無言で窓に広がる都会の景色を眺めていた。ガラスのビル群は太陽の光を反射させて大きな水晶の塊のように光っていた。

最後のわがまま イメージ曲： Dont' Say You Love Me (Piney Gir Mix) - Erasure

「美咲、美咲はいつも幸せそうに笑うよね」

一輝が携帯ごしに言った。

「もっちゃん！ だって一輝とっしょだもん」

美咲は自分のアパート部屋でパジャマ姿で髪を梳かしていた。

「え、じゃあ、もしなんかでオレがいなくなったらどうするの？」

一輝は実家の2階建ての自分の部屋の窓のところに座っていた。

「いなくなったら？」

美咲の手が止まる。

「そう。病氣かなんかでいなくなったら。美咲はどうやって幸せになるの？」

いつもながら突拍子もない一輝の質問に美咲は戸惑った。

「うんー、どうしようかな…」

美咲はパジャマの裾を指で摘みながら携帯を頭と肩の間に挟んだ。

「だろ？ 普通の人は幸せって言葉をいつも使っているんだけど、幸せって何か考えていないんだよ」

「じゃあ、一輝はどうなの？ 幸せって何だと思う？」

一輝は窓の外の夜空を見上げた。

「星を見上げている時のことかな」

「え？ それが幸せなの？ 私がいなくても??」

「あ、それはちょっと寂しいかも」

「ちょっとだけ？」

「アハハ、ちょっとだけかも」

携帯の向こうから一輝の笑う声が聞こえた。

「一輝！ いじわる！」

「でも、東京は星があまり見えないよな」

「あ、星だったら阿蘇山の上から見えるよ」

「阿蘇山？」

「そ、実家の福岡から近くだよ。あそこから見る夜空は最高なの」

「えー、マジで！ だったらオレも今度連れて行って！」

「じゃあ、8月のお盆にね」

美咲は一人で目黒川沿いの公園で夜空を見上げていた。

都心と隣り合わせの場所なのに静かで人通りが少ないスポットだ。

少し離れたところで目黒通りを走る車の低音の音がする。

美咲は思った。確かに東京の夜空は星がよく見えない。

「お待たせ」

直人がコートを着てやってきた。冬の寒さが始まってくる時期である。

「直人、ありがとう。こんな時間にごめんね」

「大丈夫です。姫の言いつけですから」

直人はいつもどんな時でも微笑んでいる。

「でも、メールも返信してくれないし。ちょっと困ってましたが」

「ごめんね」

美咲は直人の方を真っ直ぐ見るができなかった。

「それよりも、この前はありがとう。それと、…ごめんなさい。僕もマナー違反だったし、大人気なかった」

「ううん、直人が悪いんじゃないの。ほんとに」

美咲は少しの間うつむいてから目を直人の方に向けた。

「私あれからずっと考えていたの。ていうか、直人に会う前からずっと考えていたの」

美咲は少し間をおいて続けた。

「私は昔と同じように誰か新しい人を愛することができるのかって。私に幸せになる資格はあるのかなって」

「幸せになる資格を持っていない人なんていないですよ」

「私は違うの」

美咲は弱々しい声で返した。

「そんなことはないです」

直人は押し返すように強く言った。

「ありがとう。でも私は今の自分を受け入れることができないの。だから他の人を受け入れることも難しいの」

「ボクは最初からいっています。今のままの美咲さんでいいと」

「うん。でも、結局こんな歳になってまだ自分を整理できないでいるの。だから…」

美咲の目から涙が溢れる。涙がこぼれないように上を見ながら続けた。

「直人、私のことはもう忘れて。こんな女、困るでしょ」

「困るなんて…」

美咲はとめどなく溢れてくる涙を指先で拭う。

「ごめんなさい。これ以上直人に迷惑かけられないから。私は幸せになっちゃいけないの」

直人は横の川を見ながらしばらく思案している様子だった。

「美咲さん、前にいいましたよね。幸せとは自分があるのままで不足しないと感じれる状態だって。だから幸せは他人に依存しないんです」

美咲は本当に分かっているの？という顔で直人を見上げた。直人はその冷たい視線を読めずに続けた。

「だから美咲さんが僕といた方が幸せになれるなら僕は見を引きます。僕はそれでも幸せです。美咲さんが幸せなら」

(私の幸せのために？ 何言っているの)

美咲は心の中で積貯めていた言葉のテープが突然切れた。

「違う」

「違うって？」

「違うってば」

気が付くと美咲は増したを向きながら拳を握りしめながら肩を震わせていた。

「私の幸せって何よ！ 直人の言う幸せって何よ！ なんで神様はいつも私から幸せを奪うの!？」

美咲は突然目に涙を一杯貯めながら直人の胸に拳をぶつけてきた。

「私のお父さんは私が高校卒業前に亡くなったの！ そして私の一輝は私が大学卒業前に亡くなったの！ クリスマスの日にだよ！！」

美咲は拳を固く握り締めながら直人に訴えるように続けた。

「そして一輝の赤ちゃんも！ 私の赤ちゃんも！ 神様はいっしょに連れていっちゃったの！！ いつも私が愛した人は私が幸せな時にいなくなってしまうの！！」

美咲は身体全体を震わせて直人に身体をぶつけながら泣きじゃくっていた。電柱の上からの光りが涙でぐじゃぐじゃになった美咲の顔を照らしている。

「だから私は誰も愛せないの！ またいなくなってしまうから！ もう誰も失いたくない！ だから…だから…」

美咲は直人の腕の中で完全に泣き崩れた。

「美咲…、美咲！」

直人は必死に美咲を抱き寄せた。

「僕はずっと美咲の側にいるから」

「違う！ 違う！ 一輝もそういっていたの！ お父さんも！ みんなそう言っていたんだよ！！」

「美咲、美咲！」

直人は何をどう言ったら良いの分からずただ美咲を強く抱きしめることしかできなかった。

美咲は直人を強く抱きしめると赤ちゃんのように泣きじゃくっていた。

直人が顔を上に向けてと涙のせいで星空の星が何重にも沢山あるように見えた。

美咲は涙をハンカチで拭いながら遠くを歩き来する車の方を見ていた。

「直人、ごめん。私もう全部無理」

「……」

「私、人を好きになるのに疲れちゃった。人を失うので疲れきっちゃったから」

直人には返せる言葉がなかった。

「直人、だからもう私の事は忘れて。直人といるといつも一輝の声が聞こえてくるの。そしていつもこんな自分に罪悪感を感じるの。生まれてこれなかった赤ちゃんの事も考えちゃうの。私だけ幸せになっちゃいけないんだって」

「……」

「直人、なんか行ってよ」

直人はため息をついた。

「あーあ、またクリスマス前にフラれちゃったか…て」

「……」

「しょうがないですよ。多分、僕には今の美咲も一輝もその赤ちゃんもお父さんもひっくりくるめて受け止めてあげられる器がないんですよ」

「……」

「だから前の彼女にも、直人はどことなく頼りないって言われちゃうんだな」

「そうじゃないよ、直人。直人は優しいよ…」

「美咲さん、最後に僕からのプレゼントです」

気のせいか直人の声のトーンが沈んだかのように聞こえた。

直人はコートの中から何やら小さな袋を取り出した。

「最後の僕の我ままです。受け取ってください」

そういうと美咲の額に優しくキスをした。美咲は目を閉じた。
直人は小さな袋を美咲の手に手渡すとそのまま美咲から離れた。
美咲は外灯に照らされながら遠ざかっていく直人のシルエットを見つめていた。
涙のせいで外灯の光が何十にも万華鏡のように重なっていた。

最後の贈物

車が歩道の横を走る帰り道、美咲は一人で歩きながら直人との想いを思い返していた。
喫茶店での会話の時のちょっとした直人の仕草。海での手を握った時の感触。目黒川でさっきと同じように額にキスをしてくれた時の瞬間。

美咲はなぜだかとても悲しくなった。いつもみたいに一輝の顔が出てこなかった。
美咲は家に帰ると洗面台で顔を洗って化粧を落とした。
なぜか蛇口から出る水の音がいつもより大きく感じる。
女は化粧をつける時は仮面をつける。しかし化粧を洗い落とす時は鎧をはずすような感じがする。
タオルで顔を拭くと「はぁー」と美咲は溜息をつく。
鏡を見ながら思った。
(私、今日私はどんな顔をしていたんだろう…)

美咲はベージュのソファの上に座ると直人がくれた小さな袋を手にとった。
袋に手を入れるとオレンジ色のリボンにオレンジ色のハート型の箱が出てきた。
(え?)
美咲は驚いた。
美咲は高まる鼓動の緊張感をおさえながら恐ろ恐ろと箱を開けてみた。
リボンの形のリングが入っていた。
(あ、お台場の時に私がこの指輪を見ていたのを覚えていてくれたんだ)
いきなり何の予告もなしに涙がどっと溢れてきた。
美咲は目から洪水のように流れて出てくる涙を拭うことができなかった。
(私は一体何をしてしまったんだろう)
美咲はただその場で力もなく声を出して泣き続けた。
美咲の涙はオレンジ色の箱の表面を沢山の梅雨玉のように滑っていった。

■ 10回目のクリスマス

イブニング・パーティー 2010年12月17日(金)

12月後半に入ると年始末の休暇前の慌しさと忘年会の両方で忙しさは倍増する。
特に美咲の会社は年末の掃除までご丁寧に行う。なぜこの一番忙しい時期に大人たちは忘年会を連発するのであろうか。美咲は毎年のことながら不思議であった。
そしてさっそく早めの忘年会の連絡メールが来た。

受信： 2010/12/9(木)
件名： 年末パーティーのお知らせ。
本文： 恒例の年末パーティーを開催しますので詳細をご連絡いたします。
 コンシューマー事業部の第1、第2グループは、クライアントの方々もご招待下さい。

【年末パーティー詳細】

日時： 12月17日(金) 21:00～
場所： パークハイアット東京(新宿)
形式： 立食パーティー

美咲が所属しているのはイベントに絡んだ第2グループ。香奈子は第1グループに所属し、一般消費者向けのメーカー企業を担当していた。

(直人も来るんだろうな…)

直人が働いているアンプレッション社は春のイベントで協賛をしていたが、第1グループの消費財クライアントにあたる。

(直人にこのタイミングで会うのは気まずいな…)

と思いつつ美咲は頭をかいた。

その時、香奈子がうれしそうにやってきた。

「美咲よかったじゃない！ 仕事でも彼氏と会えるなんて！」

「う、うん…」

美咲はちょっと困った返事をした。

そしてその日はやってきた。

美咲、香奈子に乗せたタクシーはパークハイアットに止まった。

二人はイブニングドレスに身を包みエントランスを通るとエレベータに入った。

「瑠実はどう行ってるのかな？」

美咲が香奈子に聞く。

「瑠実は今日は受付だから早く出ていったよ」

「ハァー、クライアントの接待も兼ねているからちょっと緊張するよね」

「とかいって直人さんに会えるからうれしいんじゃないの？」

香奈子が軽くからかう。

(いや、そっちの方が気が重たいんだよな…)

二人を映し出していたブラスのエレベータードアが開くと、二人はふかふかの絨毯の廊下に出た。

会場前では瑠実が受付として数名の社員といっしょにゲストリストをチェックしていた。

美咲と香奈子は瑠実笑顔で手を振ると、最上階のパーティ会場に足を踏み入れた。

エントランスを入りすぐに見えるガラス張りの会場には新宿の夜景が広がっている。

二人はシャンパングラスを受け取るとガラス張りの方へ向かっていった。

「とりあえず最初に二人で乾杯」

香奈子はそういうとグラスを美咲のグラスに軽く当てた。

「今年の美咲のクリスマスは大丈夫かな？」

香奈子が茶化すように言う。

「うーん」

美咲は困ったような仕草をする。

「え、またー。美咲ってば」

「そうじゃなくて」

「そうそう、留美は留美で今年はダーリンが二人いるからクリスマスはどっちにするかって悩んでたよ」

「ぷ、おかしいな。留美らしいかな」

「去年はダーリンが一人しかいなかったから悩んだんだって。だから今年はダーリン複数確保したって」

「何それ、複数って」

美咲はなんだかおかしくって笑ってしまった。

「ねえ、香奈子」

「うん？」

「象と鼠の寿命は違うけれど時間は同じだって知っていた？」

「え、なんの話？」

「大切なのは量ではなくて質だってこと」

「え？ なに急に？ 新しいプロジェクト案件？」

香奈子はきょとんとしていた。

しばらくすると香奈子の部署の男性社員がやってきた。

「杉本さん、田辺様がいらしてます」

「ありがとう。じゃ、美咲、2次会でね。」

そういうと香奈子は黒いワンピースを軽くひるがえして会場の奥の方へ歩いていった。

美咲は一人で窓の外を見つめていた。暗い闇の中にたくさん光る無数の窓を見ながら2月に見たプラネタリウムの夜空を思い出した。

(直人と知り合って間もない頃だったんだよな…)

直人とはいつもどこかで心を閉ざしている美咲をそのまま受け入れようと努力してくれていた。なのに美

咲は直人に素直に応えることができなかった。

美咲はシャンペングラスの中で踊る小さな泡を見つめていた。

すると美咲の右後ろにそっとダークグレイのスーツ姿の男性がやってきた。

「お久しぶり」

直人の声だ。

「…お久しぶりです」

美咲は振り向かずにはグラスの向こうに見つめたまま答えた。

正面のグラスにはうっすらと美咲と直人の姿が映っている。美咲はグラスに映る直人の目を見つめた。直人も反射している美咲を見つめかえす。

二人は沈黙のままそのまま立ち続けた。

直人は一歩足を踏み出すと美咲の隣の位置に立った。

なおも沈黙は続く。

二人はグラスに映った自分たちを見つめ続けた。

ふいに直人が沈黙をやぶる。

「お元気ですか？」

「あ、はい」

二人はよそよそしく視線を窓の外に戻す。

「直人、ごめんね」

「大丈夫です」

「直人は初めて会った時からずっと私に優しくしてくれたよね」

「……」

「イベントのアフターの時もガーデンプレイスへ…」

「ライティングは終わってたけど」

直人が軽く微笑みながらシャンペングラスに口を当てる。

「いつも見守ってくれて、そっと私の心を開くように努力してくれたよね。でも私がいつも…」

「いいんです。姫なんだから」

直人は軽く笑って美咲の方を向いた。

はじめて二人の目が合う。直人がゆっくりという。

「時間がたてば、いつか僕のためにも美咲さんの心の中に場所をつくってもらえるかな」

「……」

美咲は何もいえずに再びグラスを見つめた。直人は悲しい顔を隠すように微笑んだ。

「大丈夫ですよ、無理しなくて」

そういうと直人は美咲の横から去っていった。

「そうじゃなくて…」

美咲は小さい声でそうだったが、独り言にしかならない。

美咲はシャンパンのグラスを見つめる。

シャンパンの泡はグラスの外に広がる夜景の光といっしょに別世界のように幻想的に光っている。

その後、美咲は香奈子といっしょにクライアントである水野と会話をしていた。

香奈子と水野が会話をしている横で、ついつい直人を探してしまう自分がいた。

「ね、美咲。アンプレッションさんの新しいマウスウォッシュは社内でも好評よね」

「あ、そうなんですよ。薬っぽくなくてナチュラルな味だし」

美咲は慌てて会話をフォローした。

「今年は堀口さんに広告のクリエイティブをやって頂いて、おかげさまでテレビでのCMも好評でした。もちろん、春のイベントのおかげでパブ効果もよかったですー」

水野はうれしそうにピンク色のシャンパンを王子のような仕草で口に運んだ。

「水野さん、もちろん我社の広報パワーですよ！」

香奈子はおどけてみせた。

「いやー高杉さんのおっしゃるとおりです」

美咲の耳に会話はあまり入ってこなかった。それよりも美咲は会場の奥で人ごみの合間から見える直人の姿をずっと目で追っていた。

(やっぱり自分は直人が好きなんだ…)

別れた後になって初めて自分の想いを認識するなんて愚かだなと美咲は思った。

直人の選曲

六本木の交差点付近にあるホテル・アイビスにタクシーがつく。
美咲と香奈子と瑠実が3人揃ってタクシーを降りた。周りはネオンが忙しい。
2次会の会場は交差点付近のホテル内にある個室型のカラオケレストランである。
「もうみんな始めているかな、ありがとうねー、私の後片付け待っていてくれて」
瑠実が六本木のネオンサインの中を歩いていく。
「カラオケっていったけどどれくらい来ているのかな」
美咲が少し心配そうに聞いた。
「30名ぐらいっていったから、うち部署といつものクライアントでしょ」
香奈子はエレベーターのボタンを押した。
「あ、じゃあ、水野さんも来てるんだ〜」
瑠実が甘ったるい声を出す。
「あんた、まさか！」
香奈子が呆れながら少々怒っているふうにいった。
「だって、ダーリンと別れたんだもん。今年のクリスマスは水野さんにしようかな」
「え、彼ってあっち系じゃなかったの？」
美咲が不思議そうにつぶやいた。
「あ、それは冗談よ、冗談」
香奈子が慌てたように訂正する。

3人はエレベーターを降りて受付で予約名をいい、ロビー階段を下りると奥のドアへ向かった。
瑠実がドアを開けるとさっそく盛り上がっている音がドツと出てくる。
「おませ〜っ！」
ピンクドレスの姿の瑠実が勢いよく入っていくと会場の中が盛り上がる。マイクを握っていた水野がスピ
ーカー越しにいう。
「瑠実ちゃん、こっち！ こっち！ いっしょにデュエット！」
「えー！ いきなりですか〜！」
といいながら瑠実はうれしそうにマイクスタンドの方へいく。
美咲は入口の方で立ちながら二人が盛り上がっているのを見ていると香奈子がやってきた。
「美咲！ こっち、こっち！」
「え」
そういうと円形のソファに座っていた直人の隣に座らせた。
美咲は直人の顔を見ることができなかった。
美咲は両手を合わせながら天井のあたりへ視線を泳がせた。
直人もどうしたものかという顔つきでちょっとよそよそしいしぐさをした。
「本当に驚きよね。仕事からの出会いがあるとはね！」
香奈子が二人の方へ体を寄せてしゃべる。
「いえいえ、そういうわけでは…」
直人が少し困ったふうに笑いながらいう。
美咲は下にうつむいた。
「もう一年ぐらいたつのかな」
香奈子が続ける。
「そうですね、3月だったから。あっという間ですよ」
直人が遠慮深そうに答える。
「美咲ったら、ずっとアート・ディレクターという職業に憧れていたの」
「アハハ」と、直人はおかしように笑う。
「香奈子、もう恥ずかしいからやめて！」
美咲は香奈子の口をふさぐジェスチャーをとりながらチラッと直人の顔を見る。
そんな美咲の仕草に気がつかずに香奈子はグラスを手にとった。
「はいはい！ それより堀口さん、今年もぜひ我が部署の売上に貢献してください！」
という、香奈子はビールの入ったグラスを直人のグラスに鳴らした。
「あとはお邪魔しないから！ 美咲、何が欲しい？ オーダーしとくわ」
「うんー、じゃ、カシスオレンジ」
美咲が若干戸惑いながら答えると香奈子は笑顔を残して席を立った。

二人は並んで座ったまま無言でいた。
カラオケの方は二人の雰囲気とは逆にかかなり盛り上がっている。
「はい、堀口さんも歌って！ 早くいれてね」
横から直人の方にリモコンが渡される。
直人はしばらく考えていたが、曲を思いついたのかりモコンに曲を入力しはじめた。
「何歌うの？」
美咲は少し緊張した口調で直人に尋ねた。
「美咲さんのために一曲」
直人は軽くウィンクすると「転送」のボタンを押した。
カラオケの画面に「選曲： 終わりになき旅」とでる。
(え…)
「この曲好きでしょ？ Jフォンの着信音」
直人は顔を近づけている。
(もう一年前なのに覚えていたんだ…)
美咲は一瞬軽く動揺した。
しばらくすると直人の入れたナンバーが鳴った。
「いい選曲だねー、懐かしいなー」
周りが拍手をした。
直人はマイクを掴むと座ったまま歌いだす。

「美咲に一曲捧げるよ」
秋の海の砂浜。
人影の少ない浜辺で一輝は波際に立っている。
突然ミスチルの歌を大声で歌いはじめる。
「閉ざされたドアの向こうに 新しい何かが待っていて
きつときつとって 君を動かしてる」
最初は笑って聞いた美咲も海に向かってハモる。
「いいことばかりでは無いさ でも次の扉をノックしよう
もっと素晴らしいはずの自分を探して」
二人の声が波にのって遠くの海へ運ばれていく。

美咲は歌う直人の隣で下を向いている。
周りが合唱しているが、自分だけは何かに耐えているかのようだ。
美咲は膝の上の自分の手に水滴がポタポタ落ちる。
(私、泣いてるの？)
胸が締め付けられるように感じられる。
美咲は何かに突き動かされたように席を立つと部屋を出た。
直人は突然の美咲の行動に驚くが、すぐにそのまま美咲を追った。
会場のみんなは何が起きたのか分からないまま合唱を続けた。
香奈子だけは状況を察したようだった。

美咲の涙 イメージ曲： Don't Say You Love Me (Radio Edit) - Erasure

部屋を出ると美咲は早足でエレベーターへ向かった。
「美咲さん！」
直人は後ろから美咲を追う。
美咲がエレベーターに駆け込むとドアが閉じる。
ドアが閉まる瞬間、美咲と直人の目が合う。
直人はあせった風にエレベーターが何階にあるかを確認する。ボタンを押すと、隣のエレベーターのドアが開くのを待った。
直人がエレベーターを出ると道を左に出る美咲の後姿が見えた。
「美咲さん！ 待ってください！」
美咲はそのまま駆け足で止まらない。

「美咲！」
気が付くと二人は裏地の静かな公園の中にいた。
電灯が暗闇の中に小雨を無数の宝石のように照らし出している。
美咲が立ち止まる。背を向けたままつむいている。
直人は美咲のところに歩み寄り抱き寄せる。
美咲は明らかに泣いている。
「いいの！ いいの！ 私のことなんて！」
美咲は直人の腕の中で直人の胸を突き放そうとする。
「美咲！ なんで」
「違うの！ 私だけが悪いの。私が悪いの。」
そういうと直人の腕の中で泣き崩れた。
「直人は悪くない。私が変われないだけなの」
美咲の肩が震えている。
「だって私はもう前の私には戻れない。だから…」
美咲の声も震えている。
「美咲、美咲がなんと思おうと美咲は今のままでいいんだよ」
直人は美咲の腕を。
「違う。私が私を許せないだけなの」
美咲は泣きながら続けた。美咲の頬の涙と雨の区別がつかなくなる。
「今日、正直行って直人に会えてうれしかった。別れて初めて直人への自分の気持ちが分かったの」
夜の暗い公園は静まり返っていたが、どこか遠くで車の流れる騒々しい音がビルの谷間に反響していた。
「直人は私のとっても大切な人なんだから。でも、よく考えるといつも私が一方的に直人の優しさに甘えているだけなんだから」
美咲は悲しそうな表情で上を見上げるとそのまま続けた。
「でも、私は私で自立しないとだめよね。一輝とかお父さんだとかって関係ないよね。困った子だよ、私…。直人もこんな私に付き合う必要ないのに。ごめん」
美咲は直人の手をほどくと雨の中に消えていった。
「ごめん」とまでいわれて、直人は追う気になれなかった。
直人は一人公園の中で一粒一粒の雨の雫が木の葉に当たる音を聞いていた。

香奈子の話

直人が公園の門を出ようとする入口に傘を差した香奈子が立っていた。
「香奈子さん…」
「堀口さん、マイク持っていつちやったでしょ…」
香奈子がくすくすと笑う。
「あ…、持ってきちゃいましたね…」
直人はマイクで頭を小突いた。
「僕またなんかやっちゃったのかな…」
「違うの、あの歌はね美咲が忘れられない歌なの」
「一年前のクリスマスの時も美咲さん、ガーデンプレイスで一人であの曲を鳴らしていたんですよ」
直人はマイクに目をやった。
「あの時は誰からの電話だと思っていたけど、今考えると違うんですよ。だって10年前の携帯だもんね。かかってくるわけないか」
直人は苦笑いをした。
「美咲にとってはこの10年、クリスマスはずっと儀式のようなものだったの」
香奈子は直人に目を合わせる。
「でも、それだけじゃないの。あの時を境にあの子は自分に対して扉を閉じたの」
香奈子は話を続ける。
「昔の自分に戻りたいけど、同じ自分には戻れない。何かにつけて一輝がいた頃の自分と比べてしまうの。だから誰と付き合ってもうまくいかないの」
「仕方ないですよ。美咲さんと一輝の過ごした時間に比べたら僕との時間なんて短か過ぎますよね」
直人は水溜りに揺れる光の反射を見つめる。
香奈子は少し迷った表情でいった。

「本当はその日、美咲は一輝と会う約束をしていたの」
「それって10年前のクリスマスのこと？」
香奈子は直人の顔を見ると重要なことを切り出すかのようにいった。
「堀口さんが美咲と出逢った場所で、美咲は一輝と会うはずだったの。でも一輝はこれなかったの。っていうか、これなくなっちゃったの」
「……」
二人の間に沈黙が流れた。雨の静かな音だけが沈黙を包んでいた。

決意 2010年12月20日(月)

12月20日は一輝の誕生日である。
美咲は一人で自分の部屋のコーヒーテーブルのところに座っていた。
美咲の前には小さなクリスマスケーキが置かれており、ロウソクが9本立っていた。
美咲は目を細めてロウソクの揺れる光を見つめた。

「なんでオレの誕生日は12月20日なんだ」
一輝はケーキを目の前に嘆いた。
「え、いいじゃない」
「よくないよ！パーティーはいつもまとめていっしょだよ。プレゼントもまとめて一つだしさ」
そういうと一輝は笑った。
「ほら、このケーキだって誕生日ケーキじゃなくてクリスマスケーキじゃん」
二人はまた大笑いした。
「大丈夫、クリスマス・イブ用にもう一つちゃんとケーキ買ってあるから」
「はいはい」
「ほら、はやく願いごとこめて！」
一輝は一瞬静かになった。
「美咲さ、来年の今頃は赤ちゃんも3人でこのロウソクを囲むんだね」
「なんか家族って感じだね」
「赤ちゃんの誕生日もオレと同じ日だったら面白かったのにな。パーティー3つまとめてできるよ」
そういうと一輝は笑った。そしてそのまま勢いよくロウソクの火を吹いた。
部屋が真っ暗になる。
パン！パン！
「おめでとう！」
二人で声をそろえていうと同時にクラッカーを鳴らした。

美咲は思い出の携帯をケーキの横においた。10年前の一輝が画像が明るく輝いている。
「一輝、お誕生日おめでとう」
「そして赤ちゃん、もし生まれていたら9歳になっている頃だね。勝手にパパと同じ誕生日にしちゃったよ」
美咲は語りかけた。
「私はもう大丈夫だよ。二人ともあっちではいっしょなのかな。今までありがとうね」
そういうと美咲はケーキの火を消した。
美咲は引き出しからオレンジ色の箱を二つ取り出してテーブルの上に置いた。
一つは新しい箱。そしてもう一つは古い箱。
両方の蓋を開けると中には同じデザインの指輪が入っていた。
美咲は古い箱の方から指輪を左手で取り出すと指輪に語りかけた。
「一輝、短い間だったけど沢山の素晴らしい思い出ありがとうね」
美咲は指輪を部屋の光にかざしてみた。リボンの形に並んでいる石がピンク色に輝いている。
「私もいつまでも昔の中には暮らせないもんね。大切な人も怒らせちゃったし」
そういうと新しい箱からリングを右手で取り出した。
同じ形の指輪が10年間の時を隔てて美咲の両手に並んでいる。
美咲の頬を一筋の涙がつたう。
「いつまでもこんな私じゃ、直人も一輝も悲しいよね」
美咲は左手の指輪を古い方の箱の中に閉まった。

「だから私、変わるよ。一輝、明日のクリスマスが最後だよ」
そうとうと美咲は右手の指輪を握り締めた。

10回目のクリスマス・イブ 2010年12月24日(金) イメージ曲: きよしこのよる - Chara

美咲は一人で恵比寿ガーデンプレイスのシャンデリアの前に立っている。
バカラのシャンデリアは10年前と同じように暖かい光を放っている。
こうやってこの場に立っていると時間の流れが止まっていて、今にも一輝がやってきそうな気がする。
美咲はもの思いにふけていたが、ハッと腕時計を見る。

クリスマス・イブの夜、9時5分。

美咲は古びた携帯をコートのポケットから取り出した。電源のボタンを押す。

(あれ…)

美咲は何度も電源を押してみるが電源が入らない。

携帯を振ってみるが画面が灯らない。

「充電したはずなのに」

携帯をひっくり返すと電池のカバーを外して中を確かめてから蓋を閉めた。

蓋には10年前のプリクラが貼ってあった。

カチャ、カチャ。

やはり電源が入らない。

(そんな…)

とうとう本当に過去携帯は過去のものとなってしまったのか。

「一輝、やっぱり過去は捨てろってこと？」

一人言をいうと、美咲は携帯を両手で握り締めたまま上を見上げた。

「あ…」

宙の上を白い妖精が舞っている。

(雪だ…)

あの時以来、クリスマスに雪が降ることはなかった。

「美咲、これでいいんだよ」

一輝の声が聞こえたような気がした。

「ママ！」

続いて子供の声が頭の中に鳴り響いた。

雪の結晶が美咲の頬をなでる。

「お別れの挨拶ってこと？」

美咲は手をお腹に当てると上を見上げた。

静寂な時が美咲を包み込む。暖かい愛に包まれているかのようだ。

その時、後ろの方からふいに着メロが鳴りだした。

いつも馴染みのある曲だが明らかに美咲のJフォンの音からではない。

「自分の携帯かな」と思い美咲はバッグから毎日使っている携帯を取り出す。でも音は鳴っていない。

(ミスチルの曲…どうして)

美咲はゆっくりと後ろを振り向いた。

「直人？」

全ての時間が止まり、全ての音が止まった。直人と見詰め合う度に起きる感覚である。

直人が自分の携帯を手にしながら立っている。

その携帯からはミスチルの着メロが流れている。

「直人…」

「似合います？ このマフラー」

直人の誕生日が遙か昔に感じられる。

「一年前、僕がここで美咲さんに初めて会った時。冗談抜きで神様からのクリスマス・プレゼントだ
と思ったんです」

「……」
「前の彼女とはクリスマス前に別れてね…」
恥ずかしそうに直人は続けた。
「一人で家にいることもできなくて、一人でここにきたんです。で、シャンデリアに向かって今度こそは自分が無理しないで付き合える彼女をくださいってお願いして」
直人はシャンデリアの上を指差した。
「そしたら美咲さんがいたんです。ここに」
「直人、ごめんね、ごめんね」
美咲は直人の目を見つめた。美咲の目から涙がこぼれてくる。
「直人はいつも優しくかったよね。最初から。ずっと。なのに、なのに」
美咲は肩を震わせながら直人の方に歩み寄ってくる。
「最初に直人がいていたよね。自分がどんな人か分かれれば、自分にどんな人が合うか分かるって」
美咲はシャンデリアを見上げた。目から溢れた涙がクリスタルのように光を反射させる。
「私、自分を受け入れられない人間なのに、他の人を受け入れられるわけがないよね」
美咲は手で涙を拭う。
「全て高杉さんから聞いたよ。美咲、もう大丈夫、大丈夫だから。美咲は今のままでいいんだから」
直人は美咲を強く抱きしめた。

■終わりなき旅

一輝はこなかった 2000年12月24日(日)

10年前のクリスマス。1世紀に一度のクリスマス・イブ。
一輝は時計を見た。午後8時20分。辺りは既に真っ暗だ。
表参道のフォリフォリの前にスクーターを止めると一輝は美咲に電話を入れた。
「あれ、つながんねーや。メッセージでもサービスしてやろっか」
一輝は人混みの中、何やら美咲にメッセージを吹き込むと携帯を切って店に入っていった。
店に入ってから10分後、一輝は表参道にあるフォリフォリを出ると急いで自分のスクーターに向かっていった。
歩道にはクリスマスライトが散りばめられておりクリスマス一色であった。
「お、雪じゃーん！ これぞホワイト・クリスマス！」
一輝はうれしそうにスクーターからヘルメットを取り出しすと腕時計に目をやった。
「いけね！ もう9時になっちゃう！」
慌ててスクーターのエンジンをかけると、一輝はスクーターで恵比寿ガーデンプレイスに向かっていった。
雪が道に積もりはじめている。
(いけない、いけない！ 約束の9時につかないと、二人の約束が！)
一輝はアクセルをふかしながら鼻歌を歌っていた。
「いいことばかりで無いさ でも次の扉をノックしよう
もっと素晴らしいはずの自分を探して…」

パパパ パーパー パパパ…

スターウォーズの着メロが鳴る。スティック型の携帯をジャケットから取り出し、画面をちらっと見る。

着信：2000/12/24(日) 20:45 美咲

「あ、一輝。ちょっと早くついちゃった。そっちは大丈夫？」
いつもの美咲の愛しい声が聞こえる。
「今バイクですっ飛ばしてるから待っててねー！ 9時には着くから！」

冷たい風を切りながら大きい声を出す。

「うん、わかった！大丈夫。気をつけてきてね」

美咲の返事を聞きとどけると携帯を切った。

「危ない危ない、絶対に9時に着かないと！」

一輝は携帯をポケットに戻そうとしたまま片手のままでカーブを右に切った。

その時スクーターが震（みぞれ）にタイヤを奪われた。

「とッ！」

一輝は慌ててもう片方の手をハンドルに戻そうとしたがバランスを失う。

スクーターはそのまま横に滑ると対向車線までずれ込む。

「！！！」

左側に顔を向けた一輝が最後に見たのは異様にゆっくりと迫りくるトラックのライトであった。

「美咲…」

知らせ

「もう一輝ったら」

美咲は玄関でコートについた雪を掃うと靴を脱いだ。

結局一輝は約束の時間に現れなかった。

美咲は一時間待っていたが連絡が取れなかったので寂しく一人で家に帰った。

再び携帯メールを確認する。

件名： 2000/12/24（日） 18:54 今晚九時に！

やはり約束の時間前に最後に見たメール以降きていない。

「連絡ぐらいくれたっていいじゃない！クリスマスに女の子を一人にするなんて」

美咲はぶつぶついいながら携帯を机の上に置いた。

突然、携帯が鳴る。

「もおー一輝！ ずっと待ってたんだから！」

「もしもし、美咲ちゃん？」

（あれ、一輝君のお母さん？）

「あ、一輝君のお母さんですか」

「美咲ちゃん、一輝が、一輝が…」

電話の向こうで一輝の母親が震えている。

「美咲ちゃん、一輝がさっきオートバイの事故で…」

受話器の向こうの声が泣き崩れた。

（え？ 一輝が？ 一輝が？）

「一輝くんが…？ 大丈夫ですか！？」

病院

夜の病院の廊下の中を慌しく足音がこだまする。

美咲は重たい鼓動ではちきれそうな胸に手をやりながら携帯を握り締めて小走り病室を目指した。

病室に入ると一輝の両親がベッドの脇にいた。

「美咲ちゃん！」

一輝の母親が美咲のもとへ駆け寄ってきてきた。

「美咲ちゃん、一輝はね、頑張ったんだけどね…。さっき息をひきとって…」

カラン

美咲の握り締めていた携帯が床に落下した。

音が鳴り響き携帯は床に着地したが、美咲の意識はどこまでも落下していた。

強い衝動が体を駆け巡り、血の気が全身から音をたてずに引いていった。

「美咲ちゃんに会いに行く途中でトラックに跳ねられて…」

一輝の母親の言葉はもう声になっていなかった。
一輝の母親は美咲を強く抱きしめた。
美咲の頭は真っ白だった。今夜は一番幸せな時間を過ごすはずだったのに、突然闇の底に突き落とされた感覚がした。

「一輝が、一輝が…。美咲ちゃん、ごめんなさい…。本当にごめんなさい。」

一輝の母親は謝り続ける。

（一輝が？ あの一輝が？ 昨日まで普通に会っていた一輝が？）

美咲は何もいえないまま立ち尽くしていた。

「一輝がさっき息を引き取るまえに、これを美咲ちゃんにって」

一輝の母親は美咲の手に小さい箱を握らせた。

美咲は何をいったらいいのか分からない。

というよりどこを見たらいいのかすら分からない。

息をどこで吸ってどこで吐いたらいいのかすら分からない。

「一輝が…？」

美咲は息を吐けないまま体が硬直した状態のままであった。

（私があの時電話したから？ あの時早く着いたから？）

美咲は横たわっている一輝のもと歩み寄っていった。

もう、あのいつも元気だった一輝が返事をしてくれることはないと感じた。

（涙ってこんな時に出ると思ったのに出ないんだ…）

関係ない考えが美咲の思考の中を横切った。

「一輝が最後に美咲ちゃんに伝えてって。先に星の世界で待っているからって…」

美咲はなす術もないまま病室を出た。

（なんで、なんで？ ずっとずっと一緒じゃなかったの？）

美咲は母親に手渡された小さな箱に目をやった。

薄暗い廊下の中、オレンジ色の箱が鈍く光っている。

美咲はオレンジ色のリボンをはどくと箱を開けた。

石の詰まったリボンの形のシルバーリングが薄暗い廊下の中でピンク色に光っていた。

美咲はその場に立ち尽くし何もいえずにただその指輪を見続けていた。

涙が美咲の手の平の上に一粒落ちた。

一粒。また一粒。そしてまた一粒。

ポタ。ポタ。ポタ。

自分の涙の一粒、一粒が体中の骨に共鳴する。

肩が震える。

世界中から全ての力が蒸発したかのようだ。

時間の潮が全て一斉に引いたかのようだ。

天の天井がいきなり遠く高くなる。

そしてしばらくすると今度は世界中の全ての悲しみが押し寄せてくる。

圧倒的な絶望。

絶対的な喪失感。

美咲は指輪の箱を手に床に座り込んだ。

そして全ての圧縮された悲しみが声となって廊下に響いた。

喪失感

「残念ですが、流産です。過度な精神的ショックからきています」

医者がカルテを手にしていう。

「まだ不安定な時期だったので、誠に残念ながら。娘さんの方はしばらく安静になさってください」

医者は美咲の母親の顔を見ると、美咲に目を落とした。

美咲はその場でうつむいて泣き出した。

手には携帯が握られていた。画面の一輝と美咲のツーショットの画像の上に涙が落ちた。

となりに付き添っていた母親が無言で美咲の肩を抱いた。

「神様、ひどい。一輝だけじゃなくて赤ちゃんまで…」

美咲は肩を揺さぶるように泣きじゃくった。

「3人で幸せな家族をつくろうねっていったのに。なんで、なんで」

「美咲、美咲」

母親は美咲をさらに強く抱きしめた。

「一輝が残してくれたたった一つの愛の形だったのに…」

美咲は両手をお腹を抱きかかえるように当てるとそのまま泣き崩れた。

そして直人は イメージ曲： 終わりなき旅 - Mr. Children

美咲は直人の腕の中で泣きじゃくっていた。

「私はずっと赤ちゃんは男の子だって思っていたの。一輝の分身だと思っていたから。まだとっても小ちゃかったけど、私にとっては愛しい子だったの。そして二人とも同時に失ってしまったの」

美咲は夢中で話していた。

「いつも後悔してたの。もしあの時に自分が一輝に電話を入れなければって。もし一秒違ったタイミングだったら違ったのかなって…。そうしたら一輝も赤ちゃんもいっしょにここにいたのかなって。思い出すたびにずっと後悔してて。なぜあの日に？って」

美咲は今までつまかえていたものを取り出そうとするかのようにしゃべっていた。

「でもね、一番怖いのは、また同じように大切な人を失うんじゃないかって。そう思うと、私、もうあの頃の私には戻れないなって。そしてそういう自分が一番許せなかったの」

鼻がつまり一呼吸おく。涙は止まらない。

「もういない過去の自分になろうとして。自分ではないものに無理に変わろうとしてて」

美咲の手が直人のマフラーを握りしめる。

「でも変わらない自分が許せなくて…。でも直人はいつも変わらなくていいよって。私はいつも心を閉ざしていたのに、直人はいつもそのまま受け入れてくれて、見守ってくれていたよね」

美咲の声が震えている。

「美咲さん、一輝さんも変わる必要はないよっていつてくれているはずですよ」

直人は美咲を見つめた。

ゆっくりとゆっくりと、二人の間の空間が溶け合うかのように感じる。

直人は少し構えて意を決した表情をすると一瞬上を見た。そして美咲の方に向き直るとゆっくりと言葉を送り出した。

「一輝もその赤ちゃんもひっくるめて全て美咲だよ。ボクは美咲をそのまま愛しているよ」

直人は美咲の目を見つめた。

「美咲が心の扉を開くのには時間がかかるなら、それはそれでいいよ。ずっと僕がいっしょに見守ってあげているから」

美咲は直人の目を見つめた。

確かに直人の瞳の奥に宇宙を見たと思った。その瞳を見ていると、「幸せ」という言葉よりも深いものを感じることができた。今の自分には何も不足していると感じることがない感覚である。

美咲はそのまま自分と直人の間の境界線が無くなっていくのを感じた。

今、この一瞬だけは絶対に永遠に時が止まっていると思った。二人は無言でそのまま強く見詰め合った。直人の瞳の中には心の壁を溶かす力が宿っている。そして、全てを包み込むような暖かさがある。

「美咲、いっしょに次の扉を開こう」

「うん」

直人は美咲を引き寄せると唇を重ねてきた。

美咲は目を閉じた。そして短くてとっても長い時間が過ぎた。

そこに一輝の姿が現れることはなかった。

「直人…」

美咲の頬から涙がつたる。

「泣き虫」

「泣いていないもん」

美咲は濡れている頬を直人のマフラーで拭いた。

「このマフラーとっても高いものですよ」

冗談っぽく直人がいう。

「私の方が高いよ」

「ですね」

「ねえ、直人。この指輪をつけて」

美咲はポケットから直人がくれた指輪を取り出し差し出した。

「はい姫殿」

直人は指輪を美咲の手から取ると美咲の左手の薬指にはめた。

8千個のクリスタルライトからなる銀河が二人の抱き合うシルエットを浮かび上がらせていた。

映画ではエンディングに東京の街の中で歩いている美咲と直人が別々に出てくる。生活の場面をきりとった感じである。カメラカットは徐々に引いていき東京全体が見える。最後には東京の真上に切替わり、カメラは上へ上へ上がって行く。地球全体が現われると、美咲の昔の携帯の待ち受け画面になる（地球が設定されている）。そして最後のメッセージが流れる↓

■ エピローグ

美咲のJフォンの携帯には一輝からの録音メッセージが一件だけ残っている。

メッセージ： 2000/12/24 20:20 中森一輝

「メリークリスマス。美咲が星を見上げる時に幸せが一杯ありますように。」

-The End- クレジットのエンドイメージ曲： Last Scene - Supercar